
NEVER&NEVER ~ 永遠と永遠 ~

風蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

NEVER & amp; NEVER 永遠と永遠

【Nコード】

N4911Y

【作者名】

風蒼

【あらすじ】

大道克己が風都を襲撃する前。まだ仲間を集めていた頃。彼は、一人の青年を仲間にした。青年の名前は芦原賢。彼は、記憶喪失だった。

これは、もし仮面ライダーエターナルの芦原賢と、ボウケンジャーの高丘映士が同一人物だったらの話です。

新しい仲間（前書き）

これは、もし仮面ライダーエターナルの芦原賢とボウケンジャーの高丘映士が同一人物だったら面白いかなと思いました。

新しい仲間

「死神の世界へようこそ」

彼が目を開けると、そんな言葉と共に一人の青年が目に入った。近くには白衣を着た女性もいる。

ここは、どこだ？俺は何故、こんなところにいる。

「どうした、まだ寝ぼけているのか？」

「ここは？お前は一体……」

男は近づくと、おおげさに手を広げ芝居がかったように言った。

「俺は大道克己。ここは俺達Neverのアジトだ」

「Never？」

「Necro-Over、略してNeverよ」

今まで黙っていた女性が、説明をした。

「Neverは、一度死んだ人間に科学薬品とクローニング技術を施し蘇らせる。けど、この細胞維持酵素を定期的に打たないと体は崩壊し死に至る。私はプロフェッサー・マリア。あなた達Neverの生みの親よ。」

「死んだ？俺は死んだのか？」

彼の問いに、彼女は目を少し伏せ頷いた。

「そうか」

そう言つて、溜息を吐くと彼はまた眼を閉じた。

どうして死んだのかはわからないが、別にいい。だが、俺はこれからどうするべきか。

「俺は、何をすればいい？」

「お前、面白い奴だな」

「?????」

何が面白いのか、克己は笑い出したが彼は不思議そうに首を傾げた。

「まあいい。それで、お前の名前は何だ？」

「名前？俺の名前」

「俺は、誰だ？」

また、新しい仲間を拾った。

今回は、俺が目を付けていたわけじゃない。そいつを見つけたのは、偶々だった。

その夜はなかなか寝付けず、気分を変えようと散歩に出ると雨が降ってきやがった。

近くのビルで雨宿りをしていると、突然ヘリが屋上に墜落。ついで銃撃音。行ってみると、フェンスに寄り掛かるようにして死んでいる青年。その青年にやられたのだろう、数人の男たち。どれも一発で胸を打たれていた。

それを見つけたとき、面白いと思った。知らない奴だったが、こいつは絶対に仲間にする。ほとんど直感的にそう思った。

こいつを連れ帰った俺を見て、おふくろは驚いたようだったがNeverにするようにいうと、何も聞かずにやってくれた。

目が覚めたこいつは、ぼーとしているようだった。

当たり前だ、今まで死んでいたんだからな。

俺達が、Neverについて説明すると驚くでもなく淡々と事実を受け止めてそれについては質問もせずに、何をすればいいと聞いてきた。

普通なら驚くか、怒りだし混乱するところをだ。

本当に面白い。だが、名前を聞いた時のこいつの反応はもしかすると。

「お前、何も覚えていないのか？」

新しい仲間（後書き）

時間軸は、ボウケンジャー最終回から数年後。映士以外は、現役を引退してサポートに回っています。映士は、アシユの血のせいかほとんど年をとっていない。そのために表には出ていません。

話の設定上ボウケンジャーが次世代に移っています。そして、悪役になります。ですが、あくまでもそれは次世代がです。

記憶喪失

「お前、何も覚えてないのか？」

克己の言葉に、彼はこくりと頷いた。その表情は、迷子の子供にも似ていた。

記憶喪失か。あの時点で既になかったのか、それとも死んだショックか

「何かひとつでもいい、覚えていることはないか？」

それに、彼は首を横に振るだけだったが、思いついたように服に手をやり何かを探し始めた。

そして、何かを見つけるとそれを克己に手渡した。

「これは、身分証か？」

それは確かに身分証だった。しかも、まだ新しい。

これは、都合がいいというか。だが、普通こんなもの持ち歩いているか？

身分証の名前は、芦原賢。年齢・24才、出身地は東京となっている。

「芦原賢、か。」

克己が呟くと、彼はそれが自分の名前だとわからなかったのか首を傾げた。

「お前の名前だ。年は24だそうだ」

そう言つて返そうとすると、紙がもう一枚あることに気づいた。

その紙には、高丘映士、シルバー、監視者、アシュ等の文字が走り書きされていた。

その中でも赤丸で囲われた文字。仲間、もう一度というのが。

「どうかしたのか？」

彼の言葉に、克己ははっとすると何でもない返し、今度はその紙を返した。

もう一枚の紙は隠して。

「記憶はおいおい思い出せばいい。来い、メンバーを紹介してやる」

そういつて、克己は彼を連れて部屋を出た。

「何か一つでもいい、覚えていることはないか？」

克己に問いかけられても、本当に何もわからなかった。俺は、誰なのかそう考えると怖くなった。俺は何処の誰で、今まで何をしていたのか。思い出すのが怖い

でも、思い出さなくては。せめて名前だけでも

彼はそう考えると、もしかしたら何か身元が分かるものを持っているかもしれないと思い、探し始めた。そして見つけた。

あつ、あつた！これを見せれば

克己は何だというように眉と顰めながらも受け取ると、すぐにそれが何か理解した。

「これは、身分証か？」

- 身分証？そっか、よかったこれで名前とかがわかる。

克己が何か言った。人の名前だった。

誰の名前だろう？

「お前の名前だ。年は24」

俺の名前？本当に？なんだか、知らない人の名前みたいだ。それに、年も。俺は、そんなに、そんなに？何だろう？

彼は、他に何か手がかりになるようなものはないか、克己に聞いてみようとしたが克己は何か考え込んでいるように紙をじっと見つめていた。

「どうかしたのか？」

彼が尋ねると、克己は何でもないというと紙を返した。

「一体何だったんだろう？」

「記憶はおいおい思い出せばいい。来い、メンバーを紹介してやる」

その言葉に、彼は克己の後を着いて行った。

こいつに着いて行けばいい。きっと大丈夫だ。そう思った

仲間

「ここだ」

そういつて、克己はドアを開けた。中には男が2人。

1人は、頭にバンダナを付けた体格のいい男。もう一人は同じく体格のいい顎髭の男。どちらも、克己と同じジャケットを着ている。

「あら、克己ちゃん。後ろの子は誰？結構いい男じゃない」

顎髭の男はオカマのようだ。男は近づくと、まじまじと彼を見た。

「下がれ、今紹介する。お前もこっちに来い」

克己は、そういつて中に入ると椅子に座り彼も呼んだ。彼は言われたとおりに、隣の席に腰を折らした。それを見て、2人も向かい合うように席に着いた。

「それで、その子は誰なの？新しい仲間が来るなんて聞いてないわよ？」

「そうだぜ。それに、見たところそんな強そうじゃねえしな」

2人の言葉に、彼は首を傾げた。意味が分かっていないようだった。

「克己ちゃん、もしかしてただけこの子にちゃんとあたしたちのこと説明してないんじゃない？」

「NEVERになったことは話したが」

「って、それだけかよ！俺達が一体どういうことしてるのかは一切なしかよ！？」

克己の言葉に、バンダナの男は思いつきり突っ込んだ。顎髭の男も、あらあらと言いたそうな顔をした。

「説明するなら一辺にしたほうが面倒が少ない。わかったらさっさと名前でも教えてやれ。混乱しているだろうが」

克己の言葉に、2人が彼の方を見ると彼はどうすればいいのかと3人を見ていた。

「そのほうがよさそうね。あたし達NEVERは傭兵部隊、依頼があればどんなところにも行って戦うい殺すそれがあたし達なの。あたしはNEVERの紅一点、京泉水。武器はこの鞭よ。どんな相手でも、締め付けてア・ゲ・ル。あなたもどう？」

そういつて、京水はウイंकを投げた。彼はそれには、思わず苦笑いしてしまった。

「俺は堂本剛剛三。武器はこの棍棒だ。どんなものでもぶっ壊してやるぜ」

剛剛三は棍棒を振り回した。棍棒は周りのものを破壊しそうな勢

いで、ぶんぶんと回っている。

「ちょっと、危ないじゃない。やめてよね」

京水の言葉に、剛三は回すのを止めると彼に名前はと尋ねた。それに、彼はどうしようかと思った。どうしても、さっきの名前が自分のものだとは思えなかった。

・さっきの名前。あれが俺の名前なんだろうけど、あんまり名乗りたくはないな。けど、名乗らないわけにはいかないからな。

「俺は、芦原賢。だと、思う」

「思いつて、どういうこと？」

彼の言葉に、京水と剛三は首を傾げた。普通自分の名前に疑問形をつけるやつはいない。

「そいつは、どうやら記憶喪失らしい。名前もそいつがたまたま身分証を持っていたからわかったんだ」

「それじゃ、こいつ何もわからないのか？自分のことも？」

そうだと、克己が答えると剛三は、まじかよ、と額に手を当て天井を仰いだ。

「克己ちゃんは何か知らないの？あなたが選んだんでしょ」

それに、克己は首を横に振った。

「今回は違う。散歩していたら、偶然こいつがドンパチやらかしている音がしてな、行ってみたら死んでいたってわけだ」

「じゃあ、こいつが強いのか弱いのかは分からないってことか」

「だが、こいつの周りの奴らは全滅していた。それも、胸を一撃でな」

「じゃあ、遠距離の攻撃が出来るのね。あたし達はみんな近距離戦闘が主だから、丁度いいわね」

京水は手を合わせて、嬉しそうに彼を見た。

「これから仲良くしましょうね」

そういつて、京水は彼の手を取った。だが、それに剛三は待ったをかけた。

「俺は認めないぜ。實力もわからない、何者かもわからないそんな奴仲間にするなんてお断りだ」

剛三は、そついうと彼を睨みつけた。

「こんな弱そうな奴が、仲間になるだと。足手まといになるだけだろ」

それに、克己は何か考えていたが、ならつと、口を開いた。

「お前と賢が戦つて、勝てば戦闘に参加させる。負ければ、サポートに回す。それでいいな？」

「てっ、結局仲間になるのは決定事項かよ」

「当たり前だ、もうこいつはNECRO・OVERなんだから」

場所を変えるぞ、と克己が行って彼らは訓練場へと移した。

勝負

「ルールは簡単、相手が参ったというか、気絶させるかしたほうが勝ちだ。武器はここに在るものなら、何でもいい。勿論素手でもいい。時間制限はなしだ」

広い訓練場の真ん中で、彼と剛三は向き合った。剛三が持つのは、愛用の棍棒。彼が持つのは、同じく棍棒だが剛三よりも30？は長い。そして、腰には拳銃を下げている。

「それじゃあ、勝負開始よ！」

京水が言葉と共に鞭を床に叩きつけると、それを合図に戦いが始まった。

「ねえ、克己ちゃんはどっちが勝つと思う？」

「そうだな。賢だろうな」

克己の言葉に、京水はえっと、驚いたように2人を見つめた。

剛三は、棍棒で叩き潰さんとはかりに攻撃している。それは力任せに振り回している感が否めないが、その一撃は壁さえも破壊する。

彼は、それを避ける。無理もない。当たればNEVERといえど只では済まない。だが、何かタイミングを計っているようにも見える。

勢いと破壊力はあるが、スピードはそれほどでもないな。離れるより、一度懷に潜り込むか

「あの子、どうして距離をとらないのかしら？銃を持っているだから、遠距離から攻撃すればいいのに」

そんなこともわからないほど、素人なのかしら。それとも、銃の腕に自信がないのかしら？

京水がそんなことを思っていると、今まで避けるだけだった彼が動いた。

彼は、剛三が棍棒を振り上げた瞬間、一気に身体を低くして懷に潜り込む。

そして、下から突き上げるように

「そこまでだ！！」

克己の声が響き渡った。

剛三は棍棒を振り上げた態勢で、彼は剛三の首に棍棒を当たる寸前で止めていた。

克己の声に2人は構えをとく。剛三は、冷や汗をかいていた。

なんだよ、こいつ。銃メインかと思ったら、本当は接近戦かよ

あら、なかなかやるじゃない。力は剛三の方が上だけど、ス

ピードは賢ちゃんの方が上ね

「やはりな。構え方からして只者じゃないとは思っていたが、戦いなれてる。それも、実践、命のやり取りをだ。」

3人がそれぞれ心内で思っていると、彼は手に持った棍棒を軽く振っていた。

「傭兵ってこんなもんなのか？あの剛三ってやつ、振りは大振りだし、ただ力任せに殴り付けてるだけじゃねえか」

「ねえ、賢ちゃん。あたしも勝負してみない？」

京水が、唐突にそんなことを言った。

「なんだ、まだ信用出来ないのか」

「そうじゃないのよ。ただ、あの戦いを見たらあたしも勝負してみたくなったのよ」

いいでしょ、克己ちゃんと言って京水は訊ねた。

「勝負するのはかまわないが、賢おまえはどうだ？」

「かまわない。ルールはこのままで？」

それに、克己は少し考えると変更だと言った。

「接近戦は見せてもらったからな、次は遠距離での戦いを見せてもらおう」

彼は頷くと、棍棒を置いて最初の位置へとついた。

「言っておくけど、手加減はしないわよ」

京水が笑みを浮かべながら言うと、彼は先ほど同じく、何も言わずに相手を見据えた。

「始め!!」

克己の合図で、2人は動いた。

「いくわよ!」

京水は鞭を唸らせ、彼に襲いかかった。

彼は、開始と共に後ろ、鞭の射程範囲外へと飛びすさっていたので攻撃は当たらなかった。

やっぱり速いわね。開始と同時にあたしの射程圏外に逃げたなんて、武器を見せたのは自己紹介の一回だけ。あの時に見切ったのね。

「おい、克己。お前はどっちが勝つと思うんだ」

剛三が、彼を睨みながら克己に訪ねた。

「決まってるだろ。賢だ」

「何で、あいつなんだよ」

「おまえこそ、何が気に入らないんだ？」

剛三が舌打ちしながらいうと、克己がそう訊ねた。

「あいつ、会ってからずっと無表情だろ」

そういつて、剛三は彼を見た。彼は、京水の攻撃をすべて紙一重で躲していた。鞭は手元よりも先の方が速い。それは、音速を超えるほどに。なのに、彼は余裕そのものだった。

「あいつ、ほんとに人間なのかよ。あれなら、人形って言った方がまだ信じられるぜ」

「確かに。あいつは、部屋に入ってからほとんど表情を変えていない。それは、記憶を失っているからだけでも言い切れんな」

「それで、他にも理由があるんだろ？」

「お前が止めなければ、完全に俺を殺る気だった」

剛三は、苦虫をかみしめながらもそういつた。確かに、克己が止めなければ彼の武器は確実に剛三の喉を突き破っていた。

「ありゃあ、完全に獲物を狩る動物の眼だぜ。それも、突然変わるんだ」

それは、克己も思っていたことだった。彼の思考は突然変わる。

「剛三の言うとうりだ。最初に賢があいつを見ていた眼は、観

察するようなものだった。

そして、いきなり狩人の眼に。その間には、一切の感情も思考もない。まるで、スイッチを切り替えたようだ

「だが、そんなのは関係ない。あいつはN C R O O V E R、だ」

それに、剛三は舌打ちをひとつすると2人に視線を戻した。

「なかなか素早いじゃない！でも、逃げてばかりじゃあたしは倒せないわよ！！」

彼は、その言葉には何も答えることは無くただ避け続けた。

そして・・・

「きゃあっ!？」

彼は何の躊躇いもなく、京水の手元を打ち抜いた。

「くっ、やるじゃない。でも、鞭を弾き飛ばしたくらいじゃあ……」

京水が打ち抜かれた手を抑えながら言うが、言い切るまでもなく更なる追撃が来た。それは寸分の狂いもなく、京水の心臓を狙っている。

「ちよつ、ちよつと少しは話す時間位」

京水は必至で避ける。鞭を拾いに行く間もないほどだ。

くつ、なかなかいい腕じゃない。けど、あんまり精確すぎる
とどこを狙っているかは、

そこまで考えて、京水は、そして、剛三も克己も思わず目を瞠
った。

彼は、笑っていた。それは、獣が獲物を追い詰めたとき、また
は狙い通りの行動をした時の笑みだった。

その笑みに、氣をとられたのは一瞬。だが、彼にはその一瞬で
十分だった。

彼が放った弾は、京水の足を掠め、体勢を崩させたところで心
臓を、撃った。

「そこまでだ！」

彼は、克己が剛三に指示をだし、京水をプロフェッサー・マリ
アのもとに連れて行くよう言うのをただ見ていた。

「賢。どんな勝負に置いても手を抜かないのは良いが、何も止めを刺す必要はない。いくら死なないと言っても、痛みはある。それにあいつらは、おまえと同じ俺の仲間だ。敵じゃない」

「そう、京水と剛三は敵じゃない。だが、こいつがあいつらを見る目は、まるで敵を見ているようだ」

「敵じゃ、ない」

克己の言葉に、彼は確かめるように呟いた。俯き加減で表情はあまり見ることは出来なかったが、その表情は悲しげだった。

「あの表情、あいつ仲間になんか嫌な記憶でもあるのか？」

「そうだ、敵じゃない。仲間だ。」

もう一度、言い聞かせるようにいうと彼の表情は少し明るくなり、コクリと頷いた。

「……すまない」

「謝るなら、俺じゃなくあいつらに、だ」

彼は、それに頷くと部屋を出て行った。

「敵じゃ、ない」

敵じゃない、仲間。俺は、あいつらを信じていいのか？信じて、裏切られたりしないのか？

そう思い、彼は俯いてしまった。何故かは知らない、だが仲間という言葉を聞いて、彼は怖くなった。それと同時に、懐かしさと悲しさも。

「そうだ、敵じゃない。仲間だ。」

克己がもう一度言い聞かせるように言うと、彼は嬉しくなった。克己が言うと、信じてみてもいいかもしれない、信じようという気になった。

・ どうしてだろう、こいつの言葉を聞いているとなんだか懐かしい気がする。何か思い出せそうだ。でも、そうだよな。仲間なら傷付けちゃだめだよな。お互い助け合わないと。謝ろう

「……すまない」

「謝るなら、俺じゃなくあいつらに、だ」

・ そうか、そうだよな。なら、早く謝らないと

彼はそう思って、部屋を出て行った。早く2人に謝らないと、とそれだけを考えて。

謝罪（前書き）

投稿順が間違っていたので訂正します。

謝罪

マリアが京水の治療を終え、廊下を歩いていると誰かが歩いてくるのに気が付いた。

「あれは、賢？」

彼は、キヨロキヨロと辺りを見回し何かを探しているようだった。

何を探しているのかしら？

そう思い、彼女が声を掛けようとするとその前に、彼がこちらに気づき近づいてきた。

「どうかしたの？」

「あいつらは、大丈夫なのか？」

「あいつら？」

彼は、不安そうに彼女に訊ねた。

「ああ、京水のこと？大丈夫よ。心配なら様子を見てきたらいいわ。剛三と一緒にあの部屋にいるわ」

マリアは、今自分が出てきた部屋を指差した。それに、彼は礼を言つと急ぎ足でその方へ向かった。

- あの2人のことが心配で早く謝りたいって感じね。あの子が怪我をさせたって聞いたけど、悪い子じゃなさそうね。真剣にやりすぎるのかしら？

マリアは、そんなことを思いながら彼の消えた方を見ていた。

- 失敗した。せめて大体の場所を聞いてくるんだった

彼は、そう思いながら部屋をひとつひとつ確認していた。

- どうする、一度戻るか？

そう思い、彼は踵を返そうとして気づいた。ここは、どこなのかと。

- もしかして、迷った、か？

そう考えて、どうしようかと立ち止まったがすぐにまた部屋を探し出した。

- 順番に確認していけば、たぶんなんとかなるだろ

そうして、しばらく探していると人の気配を感じそこに行くと、そこにはプロフェッサー・マリアがいた。

「どうかしたの？」

彼女は不思議そうに彼に訊ねた。

「よかった。これで、あいつらの場所がわかる

彼は、そう思つて安心した。知らない場所で、人も見つからない。その状況は、やはり彼にとって不安でしかなかった。心内で、いくら平気なことを思つても。

「あいつらは、大丈夫なのか？」

「あいつら？」

マリアに会つたことで安心したが、同時に2人のことが心配になつた。

「京水とかいうの、生きてる、よな。もしかして、死んでいないよな？」

「ああ、京水のこと？大丈夫よ。心配なら様子を見てきたらいいわ。剛三と一緒にあの部屋にいるわ」

それに、彼はほつとした。

「よかった。生きてる

彼はマリアに頭を下げると、すぐに彼女が指した部屋へと向かった。

部屋の前まで来た彼は、少しためらった後意を決して扉を開けた。

「てめえ、何しにきやがった」

気づいた剛三が、すぐに彼を睨みつけた。それに少しひるみながらも、彼はどう切り出そうかと考えていた。

「怒ってる、よな。そうだよな。どうしよう、謝りたい。けど、言っても聞いてくれなさそうだし。言い訳にしかない、よな。」

「おい、なんとか言ったらどうだよ」

いつまでたっても何も言わない彼に、剛三はイラつきながら言った。

「たく、なんなんだよこいつ。入ってきたと思ったら、何も言わないで突っ立てやがるし。嫌味ならとっとと帰れってんだ」

「……ま……い」

剛三が、無言の彼にしびれを切らし襟首を掴もうとしたとき、彼が何かを呟いているのが聞こえた。

「ああ？なんだった」

「賢ちゃん？」

剛三だけじゃなく、京水までも聞き返す。それに彼は、覚悟を決めたかのように頭を下げた。

「すまない！その、俺のせいで、お前たちに怪我を……」

どんどん声が小さくなっていき、最後の方は何を言っているかわからなくなった。彼は、頭を上げることが出来なかった。2人がどんな顔をしているのか、見るのが嫌だった。

- やっぱり、ダメだよな。俺なんか、謝っても意味なんかないんだ。俺は、だから

彼がそんなことを思っているとき。2人は何も言わなかった。いや、言えなかった。いきなり、頭を下げた彼に驚いていた。

なんだよ、こいつ。急に入ってきて、嫌味のひとつでも言うのかと思えばいきなり謝って黙んまりだし。これじゃ俺がいじめてるみたいじゃねえか

- 賢ちゃん、ずいぶんと気にしてたのね。熱くなりすぎて我を忘れるってタイプ、なわけないわよね。本気でやりすぎて、後で後悔するタイプね

「おい、てめえ。いつまで頭下げてんだよ。いいかげんあげやがれ」

なんととはなしに続いた沈黙に耐えられなくなったのか、剛三が怒鳴るようにそう言った。

「すまない」

だが、彼は頭を上げずにそう繰り返した。それに剛三は、彼の胸倉を掴み無理やり顔を上げさせた。

「てめえ、それは嫌味かよ。謝罪なんて、一回聞けば十分なんだよ。何度も、言う必要なんてないんだよ。第一、てめえは何に對して謝ってんだよ」

そう言つて、剛三は彼を突き飛ばした。彼はその勢いで扉に当たり、また下を向いてしまった。それに、剛三はひとつ舌打ちをするとそっぽを向いてしまった。

「ちよつと、剛三。いいすぎよ」

京水が咎めるように言うが、剛三は目を合わせようとしなかった。それに、京水は溜息を吐くと、彼に向かって話し始めた。

「ねえ、賢ちゃん。あなたは何に對して謝っているの？もし、ただ言っているだけならもう言わなくていいわ。迷惑なだけだから」

それに、彼は何か言おうとしたがまた俯いてしまった。その時、一瞬彼の瞳に光るものが見えた気がした。

「そっか、やっぱり迷惑だよな。俺は、ば……も……だし」

「でも、違ふのなら理由を言つてほしいの。理由もなしに言われたんじゃ、あたし達も困るから、ね？」

その言葉に、彼は思わず顔を上げた。その表情は驚きに彩られ、何故、どうしてといった。

それに、京水は苦笑すると、ほらつと剛三の頭を叩いた。

「ちつ、聞いてやらないこともない。だから、とつとと話せ」

剛三も、いまだ不機嫌ではあるがしつかりと彼に目を向けてそう言った。

「言ってもいいのか？」

「だから、良いって言ってんだろ。早くしろ」

・聞いてくれる、俺の話。嬉しい

彼は、頷くと涙をこらえながらぼつりぼつりと理由を話し始めた。

「克己は、俺もお前達の仲間だと言っていた。仲間っていうのは、お互いに支えあい、助け合うものだろ。お前たちは敵じゃない仲間だ。なのに！俺は、お前たちを殺そうとした。いや、殺した！いくら死なないと言っても、一度殺したんだ！折角、折角また仲間が出来たのに。俺を仲間だと人間だと言ってくれる人に会えたのに」

彼はこらえきれないかのように涙を流した。声は出さずに、ただ泣いていた。

京水は、彼に近づくと手を伸ばした。彼は、びくりと身をすく

ませるが京水は構わず彼の頭を撫でた。それは、子供をなだめるような優しいものだった。

「泣かないで、賢ちゃん。あたしは別に気にしてないわ。あたしはNEVERよ、死者なの。だから、殺したなんて思わなくていいわ。それに、あたしは嬉しいの」

「嬉しい？」

「そうよ。あなたはあたし達を仲間だと思ってってくれていた。そして、心配してくれていた。それだけで嬉しい。あたしは、あなたを仲間だと認めるわ」

それを今まで黙ってみていた剛三は、けつと吐き捨てると自分も彼に近づきその背中をばしと叩いた。

「いつまでも泣いてんじゃねえよ。その、俺も言い過ぎた。悪かったよ。お前にもいろいろあるのに。ほら、俺よりも強いんだから泣きやめよ」

「それって……」

「だから、俺もお前を仲間だつて認めてやるって言ってるんだよ。俺よりも強いのは確かなんだからな」

2人の言葉に、彼は頷いたが涙が止まらず。しばらくの間泣き続けた。その間、京水は優しく頭を撫で、剛三は悪態をつきながらも彼を慰めていた。

- たく、面倒な奴らだ。けど、これで蟠りは消えたな。

部屋の外、その扉に寄り掛かるようにして克己が中の様子を窺っていた。彼は、3人の様子が気になって見に来たのだが、それは杞憂だった。

- まあ、後はあいつらしだいだな。

克己は口元に微笑を浮かべると、そこを後にした。扉の向こうでは、まだ2人が彼を宥める声が聞こえていた。

「ねえ、葉くん。映土くん見つかった？」

ボウケンジャーのメンバーが集まるサロン。黄色いジャケットを着た少女が、赤いジャケットを着た青年に訊ねた。

「いや、まだまだ。だが、あいつ1人でそう遠くまで逃げられるはずはない」

彼は、首を横に振るがすぐにそう言い切った。その声音には、怒りが滲んでいた。

「葉の言うとおりだよ、神無ちゃん。あいつは裏切り者で犯罪者、どこにも行くあてなんてないだから。それに、化け物だしね」

青いジャケットの青年が、楽しそうに言った。

「それに、どこに身をひそめていても春樹に見つけられない者はないさ」

黒いジャケットで青のジャケットの青年と同じ顔をした青年が、彼を見ながらいった。

「もちろんさ。その時は、冬樹も手伝ってよ。俺は荒事は苦手だし」

彼らがそう言って笑い合っていると、今まで我関せずといった

様子でコーヒを飲んでいた桃色のジャケットを着た女性が口を開いた。

「みなさん、おしゃべりは結構ですがやるべきことはやってください。私は手伝いませんから」

「うわ、相変わらず秋乃さん冷たいね」

神無はそういつて、彼女を指差した。

「でも、あいつを見つげ出すのも今の任務と並行してやってくれないかな」

サロンの扉が開き、14、5歳の少年が入ってきた。

「別に、優先する事柄でもないんじゃないのか？あいつがいなくても、困ることなんてないし。まあ、弾除けがいなくなったのは惜しいけどな」

「それに、モルモットもね」

冬樹と春樹が笑いながらそういつが、彼は首を横に振った。

「それがそうもいなくてね。あいつは見た目だけなら人間だからね。訴えられでもしたらサージエスの信用問題にかかわる」

「レオくんて心配性だね。そんなの秋乃さんがどうにかしてくれるよ」

ね、つと神無が秋乃に同意を求めるように言つと、彼女もまた

頷いた。

「東之宮家の力を使えば、どうということはありません」

「そっちはね。でも、マスコミになんて情報を流されたらたまったもんじゃない。それに、あいつそのものがうちの機密そのものだしね。他のやつらに獲られる前に見つけ出してもらいたい。見つけ出したら、好きにしていいいから」

その口調こそ軽いものだったが、それは命令だった。

「了解した。好きにしていいいと言ったが、どれくらいまでだ？」

「もちろん、死ななければ何をしてもいいよ」

葉の質問に、レオは笑顔で言い切った。死ななければ、拷問でも人体実験でも、武器の練習台でも、慰み物でも、と。

「ちょうどいいや、面白い葉が手に入ったんだ。早く試してみたかったんだ」

「へー、面白そうだな。俺も混ぜろよ」

「あたしも、試してみたい技があるんだ。」

彼らは楽しそうにそう言った。それは、子供がおもちゃで遊ぶように。

「ですが、あれがいなくなって戦闘に支障が出ています。A・S G Sのこともありますし、どうしますか？」

秋乃がそういうと、みんなはそれぞれ考え込んだ。戦闘はできないわけじゃない、それどころか自信はある。だが、そんな面倒なことはしたくない。

「そうだ。最近裏の情報で、面白い組織を見つけたんだ」

「面白いもの？」

春樹は頷くと、説明を始めた。

「うん。その組織はNEVERといってね、戦闘のプロ。傭兵部隊だそうだよ。それも精鋭のみを集めた組織で、人数は片手の指で足りるくらいしかない。ね、都合がいいと思わない？」

「そうだね。邪魔になったらいつでも消せる。うん、いいよ。そいつらを使おう」

レオが許可を出したことで、彼らに依頼することに決まった。

「じゃあ、早速連絡をとるね」

そういつて、春樹はパソコンをいじりだした。

「これで、問題のひとつは解決だ」

「あいつの方もさっさと済ませないとな」

「ほんと、裏切るなんて許せないんだから」

「きつちり罰を与えないといけませんね」

「僕の方もちゃんと残しといてよ」

そう言つて、彼らは笑いあつた。

悪夢

何処とも知れない暗闇の中。そこに、彼はぼつんと立っていた。

「ここは、何処だ？何故、俺はこんな処に」

彼は不思議そうに周りを見回すが、闇以外は存在していなかった。いや、例えあつたとしてもこれでは判らないだろう。

そうしているうちに、どこからか声が聞こえた。姿は見えないが、自分の直ぐ近くから聞こえるような気がした。

「…あれが半分」
「…ってガキか……」

「お前の母親は」
「。」「の血を増やす為にお前の父親と結婚した！」

声は、自分に向けて話しているが、所々が抜け落ちて聞こえなかった。どうしてだかはわからない、けどそれが大事なことのようないきが彼にはした。

「よく聞け、」
「！母さんは確かに」
「だが、俺は真剣に愛した！母さんだって心から俺を…お前を……！！」

今度は別の声が、訴えるように、言い聞かせるように語りかける。これは、父親？

「。」「。お前に仲間が助けられるのか？今度も自分の」

『を押さえられるとは限らないぜ。お前のせいで彼奴らが死ぬかもな…』
『を死なせたようにな！』

また、最初の声が言う。こいつは、俺を嘲っている。でも、それだけじゃないような。でも、死なせたって。俺は、誰を死なせたんだ？それに、仲間って？克己たちの前にも、誰かいた？

- 『
『がお前の錫杖を分析して、同じ力をこの』
に持たせた。これがあればお前は』
』になる事はない

最初のやつとも、父親と思う声とも違う声。こいつは一体？こいつが仲間、なのか？それに、錫杖って。俺は何になるんだ？

- お前の使命はなんだ！お前の使命は『』
』と戦うこと』
…お前はそう言った。

- お前は自分の中の』
』の血を憎んでいるんだ。その激しい憎しみが、お前の心が』
』の血を目覚めさせるんだ

使命。俺は、何かと戦っていた？何と？それに、憎んでいるって。俺は何を憎んでいたんだ。俺の中にある血って、どういうことだ？

- その人類とやらが、そんなに偉いのでござるか！？

- 『
『殿だけは拙者を理解しようとしてくれた…

また違う声。理解する？俺が？それに、こいつは何を哀しんでいるんだ？どうして俺なんかになんかそんなことを言うんだ？

- お前こそ、ケイが残した唯一の穢れ。お前を生んだせいで、ケイの魂は百鬼界にも行けず次元の狭間で苦しんでいる

ケイ？誰だ？その人は俺の何なんだ。でも、その名を聞くと温かい気持ちになる。けど、苦しい。何でだ？

その声を最後に、もう何も聞こえなくなった。何だったんだ、あの声は。あいつらは言いたいなんなんだ。俺の何なんだよ。誰か、教えてくれよ。

どれくらいだったのかはわからない。彼が立ち尽くしているとまた声が聞こえてきた。けれど、それは今までの声とは違いとても小さくともすれば聞き逃してしまいそうだ。

「何だ、誰かが泣いている、のか？」

そう、暗闇の中誰かが泣いている。姿は見えない、だが子供の声のような気がする。

- ねえ、どうして？どうしてなの？何で、こんなくらの？せっかく、光を掴めたのに。どこから間違えたの？

その声は、どんどん近くなっていた。それとともに、遠くの方で光が見える。白い光。それは、徐々に形を変えていく。

- 僕が『 』だったから？それとも、人を求めたから？僕は、友達が、仲間が欲しかっただけなのに。それが、いけないことだったの？何がきっかけだったの？なんで、僕はただ、皆と一緒に居たかっただけなのに。

そうして、その光は少年のような形を……。

「賢ちゃん！ねえ、大丈夫。しっかりして！！」

「うっ、」

突然なにかに揺らされ、彼の意識は覚醒した。はっきりとした目を開き正面を見ると、そこには安心した表情の京水。隣には剛三が、少し離れたところには克己もプロフェッサー・マリアもいる。

「よかった、目を覚ましたのね。どこか、痛いところはある？」

彼は暫くぼーっとしていたが、京水の言葉に首を横に振った。

「そう、でも念のため検査したほうが良いわ。京水、少し場所を貸してくれるかしら」

マリアがそういって、彼に近づこうとすると剛三が遮るように間に立った。

「何のつもり？」

「今、あんたを賢に近づかせるわけにはいかない」

そう言って、2人はにらみ合った。彼は、2人が何故そんなことになっているのかわからない。だが、自分が原因だということだ

けは分かる。

「ねえ、賢ちゃん。倒れる前の事、憶えてる？」

- 倒れる前？わからない。というか、俺は倒れたのか？

「その様子じゃあ、憶えてないみたいね」

そう言っただけ息をひとつ吐くと、京水は説明を始めた。

「プロフェッサー・マリアが細胞維持酵素を投与しようとしたら、いきなり怯えて暴れ始めたのよ。あたし達も止めようとしたけど無理で、彼女が睡眠薬や安定剤を打とうとしたら更に怯えて、そのまま気絶しちゃったのよ」

- だから、剛三はプロフェッサーをこっちに来させないようにしてくれてるのか

彼がそう思っていると、京水は手首を擦りながらそこを見た。そこには白い包帯が巻かれている。

NEVERである自分達は、たとえ傷を負ってもすぐに癒える。それは、致命傷でも同じ。最初の時、京水の傷がすぐに癒えなかった方がおかしいのだ。

「それは、俺がやったのか？」

彼がそう尋ねると、京水は擦っていた手を止め包帯を隠した。その行動を見て、彼は確信した。自分がやったのだと。

！
「お前のせいで彼奴らが死ぬかもな……父親を死なせたようにな

彼の耳に、先ほどの言葉のひとつが甦った。今度は、抜け落ちていた部分もはつきりと。

彼は、体を起こし立ち上がろうとした。だが、それは京水に止められた。

「ちょっと、まだ寝てなきゃだめよ。あなたは倒れたのよ」

「平気だ。放せ」

そういつて、どうにかベッドから降りようとするが、力は京水の方が上。結局は抑え込まれてしまった。

「お前は何処に行こうとしているんだ」

今まで見ていただけだった克己が、彼に向けて言った。それに、まだ言い合いを続けていた剛三とマリア、そして京水と彼も目を向けた。

「お前は記憶がないんだろう。ここを出て言っていく場所があるのか？それとも、何か思い出したのか？」

「……ここを出ていくとは言ってない」

少しの沈黙の後、彼がそういつと克己はそうか、とだけ言った。京水と剛三はほっとしたような顔をしていた。

「俺には、行く場所なんてない。でも、ここにもそう長くはいられない。3人は俺を心配してくれている。それはうれしい。でも、俺もみんなが傷つくのは見たくない」

「賢。何か悩み事があるのなら言え。1人で抱え込むな。言っただけだ、俺達は仲間だと。もし、お前が記憶を取り戻したいのなら協力してやるし、そのままでもいいのならそう接する。今回のようなことがあればフォローしてやる。だから、言え。そうじゃなければわからない」

克己の言葉に、彼は胸の中が温かくなるような気がした。

「でも、俺は父親を殺した。俺のせいで死なせた。だから、もしかしたらこいつらのことも」

「賢ちゃん、克己ちゃんの言うとうりよ。話してくれないかしら。あたしも、力になりたいの」

「酵素を打つたんびに暴れられちゃ敵わねえからな。聞いてやるよ」

「こいつらは、俺の話を聞いてくれる。でも、いいのか？夢のことを話したら、こいつらもあいつらと同じく。それに」

「賢。俺達を信じろ」

迷っている彼に、克己はまっすぐに目を見て言った。彼は、それを見てやはりこいつには敵わないと思いい口を開いた。

「わかった。けど、プロフェッサーは席を外してくれないか」

「私が信じられないというの？」

プロフェッサーの言葉に、彼はそうじゃないと言って言葉を探した。そんな様子を見て、彼女はひとつ溜息を吐くと分かったと言っ
て立ち上がった。

「私は研究所に戻るわ。何かあったらすぐに呼びなさい」

そう言っ
て、彼女は部屋を後にした。完全に部屋から離れたことを確認した彼は、知らず詰めていた息を吐きだし、話始め。

「俺のせいで、父親は死んだ。だから、お前たちも死ぬかもしれない。そう思ったから」

「出ていこうとしたのか」

克己の言葉に、彼は俯きながらも頷いた。それに、克己は大きく溜息を吐くと彼に向かって言った。

「お前は馬鹿か。最初に言ったはずだ、俺達は死者だと。すでに死んでいる俺達に、死なせるかもしれないとか、死ぬとか関係ない。それに、見縊るなよ。お前にやられるほど、俺達は弱くはない。お前が俺達を殺すのなら止めるし、お前を狙っている奴らがいるなら俺達も手を貸す。お前の敵は俺の敵だ」

克己の言葉に、京水も剛三も頷いた。それに、彼はまた嬉しくなった。

「どうしてなんだ。こいつらは俺が一番欲しい言葉をくれる

「ありがとう」

彼はたまらずに、そう呟いた。そのまま沈黙が続いたが、それは嫌なものではなかった。

「そういえば賢ちゃん、さっき自分が父親を殺したって言ったけど。記憶、戻ったの」

京水が思い出したようにそういうと、剛三もそういえばというような顔をして首を傾げた。克己も、答えを待っているらしくじつと彼を見つめている。

「戻ってはいない。けど、気を失っているとき夢を見ていた。そこは暗い闇の中で、何も見えなかった。誰もいなかった。ただ、声が聞こえた。声の主は一人じゃなかった。俺が父親を殺したと言った声に、父親と思しき声。俺に向かって、何か必死に訴える声、人類を憎みながらも、俺に自分を理解してくれたと言っていた声。そして、俺を穢れだという声。どの声も、途中言葉の一部が抜け落ちていて聞こえなかった」

「他には、何か聞こえたか？」

「最後に、子供の泣いている声が聞こえた。こいつの声だけは小さくてもはつきり聞こえた。どうしてなの？何で、こんなくらいなの？せつかく、光を掴めたのに。どこから間違えたの？僕が」

『だったから？僕は、友達が、仲間が欲しかっただけなのに。何がきっかけだったの？なんで、僕はただ、皆と一緒に居たかっただけなのに。』と言っていた」

部屋にまた沈黙が下りた。だが、さっきとは違う。重いものだった。

「なあ、そいつは一体何なんだ？ そいつは自分が一体何だと言おうとしたんだ？」

剛三が尋ねるが、彼は口を横に振るだけ。誰も答えを持っていない。

「そいつが誰なのか、夢の会話は一体何なのか。それはいい。だが、ひとつだけ聞くぞ。お前は記憶を取り戻したいか」

克己がそういうと、彼は考え込んだ。

「記憶を取り戻す、か。気にはなる、だが怖い。俺が何なのか、知っては戻れなくなるような気がする。せつかく見つけた、この場所に。温かいこの場所に」

「いや、いい。夢は気になるが、時が来れば自然と思い出すだろう」

そう言っつて、彼は気分が悪いといって自分の部屋に行ってしまった。

彼がいなくなった後、彼らは黙っていたが。彼らは引き留める

ことはしなかった。

「おい、剛三。お前はこれを調べる」

そう言つて、克己は剛三に一枚の紙を渡した。それは、克己が最初に彼と会つたときに身分証と一緒に渡されて、返さずに隠し持つたものだった。

「何だよこれ？」

「それは、賢が身分証と一緒に持っていたものだ。それに書いてある、高丘映士。それを調べろておけ」

「克己ちゃん。あたしは？」

「お前は芦原賢という人物が存在するのかを調べる。俺は身分証の住所を調べる」

そう言つて、一人ひとりに指示を出した。

「けどよ、あいつは別にいいって言つてたじゃねえか」

「念のためだ。もしかしたら、あいつを狙っているやつがいるかもしれないからな」

「そうね。それに、いろいろはつきりさせて安心させてあげたいものね。自分がちゃんとここにいていいんだってね」

「ちつ、しゃあねえな」

そう言って、3人はそれぞれものを持って部屋を後にした。

依頼

「ねえ、克己ちゃん。賢ちゃんについて何かわかった？」

パソコンに向かっている克己に、持っていたコーヒを渡しながら京水が尋ねた。だが、彼は首を横に振る。

「だめだ。身分証の住所を調べてみたが、だれも住んでいない。お前の方はどうだ？」

「こっちもお手上げよ。いろいろ調べてみたけど、芦原賢なんて存在しなかったわ」

そう言っ、彼はため息を吐いた。

「本当に、あいつ何者なんだろうな」

剛三が、椅子をくるくると回しながら呟いた。

今この部屋には、彼を除いた3人がいた。3人は、どうにかして彼の身元を調べていたが、何もわからない。

「でもよ、調べる必要なんてあんのか？別に、悪い奴じゃねえんだし」

「確かにそうだけど、何かわかれれば記憶を取り戻す手がかかりにはなるでしょ？それに、言っただじやない。人として、見てくれる人に会えたのにつて。きっと、無意識に過去に囚われているのよ。」

何とかしてあげたいじゃない」

そう言っ、彼はまたパソコンに向き直った。確かに、それは言葉には出さなくても2人も同じだった。NEVERとなったからには、仲間であり家族も同然。そんな彼が、無意識とはいえ過去に囚われ距離をとっている。となれば、力になるうとするのは当たり前だ。

「そう言えば、もうひとつの方はどうだ？」

「高丘映土のことか？あれなら見つかったぜ」

剛三はそう言いながら、克己に資料を渡した。

「高丘映土、SGSのレスキュー部隊所属。29歳、独身。家族構成、父母ともに死亡。SGS所属前は、稼業をしていたがそれが廃業になったとき、スカウトされた」

克己が資料を読み上げる。京水も、手は止めずに耳だけで聞いている。

「この、稼業というのは何かわかるか？」

「いや、それがよくわからねえんだ。ついでに言つと、親についてわからなかったぜ」

剛三がお手上げと言ったように、手をあげた。

「こいつも、か。どっちを調べても詳しいことは分からずじまい。どんな、関係なんだ」

「おい、こいつの写真はあるか」

剛三は首を横に振った。

「1枚もないのか？」

克己が眉を顰めながら問うと、剛三はそれにああ、と苦虫を噛み潰したように頷いた。

「それ、おかしくないかしら？」

京水が手を止めて話に入ってきた。その眉間には、しわが刻まれている。

「大体の企業っていうのはね、入社した時に社員証を作るために写真を撮るでしょ。なのに、1枚もないなんて。ありえないわ」

「となると、考えられることはふたつ。ひとつはこの資料が偽物だということ」

克己の言葉に、剛三は不機嫌そうな表情をした。その情報を手に入れたのは彼だ。偽物を掴まされたとも思ったのだろう。

「だが、こいつが偽物だとしたらもつと現実味のある情報を載せるだろう。データだけでなんて、写真もない。企業でのこと以外不明なんてあまりにもわざとらし過ぎる」

「そうね。でも、偽物だとも言い切れないわ。逆に、わざとらし過ぎるから本物って考えることも出来る。その場合は、誰かが彼

の情報を隠蔽していると考えていいわ」

そういつて、京水は克己が持っていた資料を1枚1枚見ながら言った。

「隠蔽つて、どういうことだよ。それ」

「そんなのわからないけど、たぶん知られたくないからよ。でも、彼については住所もはっきりしているから、直接言つて調べることができるわよ」

どうするの、と彼は克己に訊ねた。

・高丘映士と芦原賢。何の関係もない、つてのはないだろう。だが、果たしてこいつのことを調べるのが賢のためになるのか

「あ、そういえば。こいつ、どうやら今行方不明らしいぜ」

剛三が思い出したというように、声を上げた。

「行方不明、だと？」

「ああ、確か4日前。お前が賢を拾ってきた次の日からだ」

・これは、偶然ではすまされないな。この2人の間には、必ず何かがある

克己はそう確信すると、口を開こうとした。だが、それを遮るように、パソコンにメールが届いた。それはSGSからで、NEVERを雇いたいというものだった。

「丁度いい。おい、お前らはSGSに行つて直接情報を探つてこい。俺は賢を連れて高丘の家に行く」

「わかつたわ。じゃあ、さつさと準備するわよ」

「たく、しゃあねえな」

そうして、彼らは動き出した。

会談

「お待ちしていました。NEVERの方ですね」

SGS博物館のエントランス。依頼主を待っていた剛三と京水の元に、ひとりの職員が近づいて声をかけた。他の職員とは違い、赤いジャケットを着ていた。

「用件はなんだ？さつさと話せ」

「ちょっと剛三。そんな言い方はないでしょ。失礼よ」

「いえ、構いませんよ。俺は、夏木葉といいます。どうぞよろしく」

そういつて、彼は笑顔で握手を求めた。だが、2人はそれに気づかないふりをする。

「知っているわ。特殊部署のチーフさん」

京水の言葉に、夏木は小さく目を見開いた。それは一瞬だったが、2人は見逃さなかった。

「けっ、特殊部隊のチーフつつうからどんなのかと思えば、素人じゃねえか」

「甘いわね。この様子じゃ、案外簡単に情報を聞き出せそうね」

「驚きましたね。随分優秀な情報屋と繋がりがあるようで」

「あら、ありがとう。ちなみに、その情報はあたしが拾ったのよ」

簡単だったわ、そういつて笑った京水に、彼は頬を引き攣らせながらも奥へと案内した。

彼らが案内されたのは、施設の一番奥にあるサロンで、そこには4人の男女がいた。夏木が、紹介しようと口を開いたがそれを見するように、2人は中央の椅子に腰かけた。

「紹介はいらないわ。それよりも、依頼内容を聞かせて」

「そうそう。俺はお前達には興味なんかないんだよ。あるのは、内容だけ。もっとも、ここにそんなのがあるとは思えないがな」

2人の言葉に、5人は一気に機嫌を悪くした。

「ほんと、素人ね。プロなら、このくらい流しなさいよ」

京水はそう思ったが、彼らが話そうとしないのでこちらから話を切り出した。

「依頼のメールを寄越すのはいいけど、差出人は不明。依頼内容も書かれていない。報酬もはした金で、わざわざ人を呼び出すふざけているのかしら？」

「人の生死で商売をしているあなた達に、言われたくはありません」

せんね」

そう言って、秋乃は彼らを見ずに言い放った。声は氷のように冷たい。

「あら、そんなあたしたちに依頼したのは何処の誰だったかしら。別に、このまま帰ってもいいのよ。他にも客はいっぱいいるんだから」

その言葉に、彼らは文句を言おうとするが、夏木がそれを止めた。

「それはすいませんでした。ですが、メールで話せる内容ではなかったもので。それに、私たちは迂闊に外に出ることが出来ないのです。報酬の方も、話し合いしだいで変えますので」

そう言って謝ったが、目には怒りが見て取れた。

「じゃあ、話を聞かせて頂戴。内容次第では受けるわ」

それに夏木は頷くと、春樹に目配せをした。彼は頷き、2人の前に資料を出した。

「あなた達には、ここに書かれている者たちを殺してほしいのです」

その資料は、ネガティブリストと書かれていた。夏木は、自分の分をとり説明を始めた。

「まず、ダークシャドウの頭領幻の月光。幹部の風のしずか。

彼らは影の衆という忍者の末裔で、様々な忍術とツクモガミという化け物を使っています」

書かれていたのは、青い鼻のような生き物と若い女性。

「次に、ジャリユウ一族の生き残りである二匹の竜人兵」

赤い竜を擬人化させたような怪物が二匹写った写真が張られている。

「そして、最速の狩人・伊能真墨。その仲間で、パートナーである古代の巫女・間宮菜月。同じく、仲間である空の頂・最上蒼太深き知恵者・西堀さくら。彼らはかつて、SGSで働いていたのですが、あることをしでかし首になりその時あるプレシヤスを盗んでいきました。」

資料の写真に写っているのは、生意気そうな青年と明るい少女。優しそうな青年、真面目そうな女性だった。彼らはそれぞれ、黒、黄、青、桃の服を着ている。さらに隣の説明書きには、トレジャーハンター、予知能力者、情報屋、財閥の跡継ぎと書かれていた。

「彼らが、この五人の前任者つてどこかしら。でも、だとしたら赤はどうしたのかしら」

「おい、こいつらが盗んだプレシヤスつてのは何だ」

「彼らが盗んだのは、『闇の三つ首竜』、『レムリアの太陽』、『虹の反物』、『亡国の炎』、そして、『百鬼鏡』。彼らは、それぞれ自分たちに関わりがあったものを持って行ったんです」

「ちよつと待つて、首になつたのは4人よね。なんで5つ盗まれているの」

「もしかして、もう1人いるんじゃないのか」

2人の言葉に、彼は頷くと、別な資料を取り出した。

「盗んだのは4人ですが、いなくなつたのは5人です。このいなくなつた5人目は、ついこの間まで私たちの仲間だったので、その4人とも深い繋がりがありました。そのために、彼らにこちらの情報を横流ししていたため首にしたのです。その時に、こちらにとって機密ともいえる情報を盗んでいきました」

そう言つて渡された資料には、20代前半くらいの青年。茶色の長髪に、一房だけの銀の髪。銀のジャケット。着ている服こそ違うが、それは

- これは、間違いねえ

- 賢ちゃん、ね

「気が付いた時には、もう行方を眩ませた後でした。出来れば、彼を捕まえてほしいのです」

京水と剛三は少しの間考え込んでいたが、確かめるように剛三が口を開いた。

「要するに、ここに書かれてるネガティブとかいうやつらの抹殺と4人が奪ったプレシヤスの奪還。で、こいつの捕獲が依頼ってことでいいのか？」

「その通りです」

「内容はわかったわ。でも、あたしたちは話を聞きに來ただけ。やるかどうかは、リーダーが決めるわ」

「わかりました。ですが、これは他言無用でお願いします」

そうして、この話は終わりと2人は立ち上がって部屋を出ようとしたが、思い出したと、訊ねた。

「最後に一つだけ聞いておくわ。その捕獲しなければいけない人の名前、なんていうのかしら？」

「言ってませんでしたか？彼の名前は高丘映士。仲間だった人ですよ。大切な、ね」

その言葉には、何か含まれているような気がしたが。2人は、聞くべきことは聞き終えたと、今度こそ部屋を後にした。

高丘邸

「此処だな」

克己と彼は、今高丘映土の家の前に来ていた。そこは、森の中に建つ洋館で、現実と一線を画していた。

「此処は？」

「今度の仕事と関係がある人物の家だ。もつとも、今は行方不明だがな」

2人が中に入っていくと、そこは到底人が住んでいるとは言えないほど荒れ果てていた。

「ここの住人が行方不明になってどの位たつ？」

彼が問うと、克己は眉を顰め、自分の記憶と照らし合わせ確かめるように答えた。

「確か、4日前だったはずだ」

「4日、5日で効かないんじゃないか？」

そこはまるで、何年も人が近づかなかったかのように埃がつもり、カーテンは閉め切られている。光も射さず、昼間だというので夕方のように暗かった。

「少なく見積もっても、5、6年は経っているんじゃないか？」

彼は部屋を見渡しながら、そう言った。克己は、自分も部屋を確認しつつ彼の様子を窺っていた。

「もし、賢と高丘映土が繋がりがあるのなら、この家にも来たことがあるはずだ。だが、この荒れようは一体？」

2人は一部屋ずつ扉を開け、調べていった。何か不審な点はないか、手がかりになるようなものはないか。そうして、寝室のひとつに入った時だった。彼は机に着いていた引き出しを開け、何かを手に取りじつと見つめていた。

「どうした？何か見つけたか」

それに、彼ははっとしたように首を振り手に持っていたものを戻そうとした。だが、克己は彼の腕を掴み止めると、それを手に取った。黒い数珠玉のようなものを繋げ、白い勾玉を2個付けた首飾りだった。

「これがどうした」

克己がそういうのも当然だった。首飾りはデザイン自体は古いが、何の変哲もないものだったからだ。だが、これを見つけたときの彼の反応は見過ごせるものではなかった。

「嬉しそう。いや、違う。もう2度と会うことのないものに会えた。そんな感じだな」

「それを戻せ」

彼が、首飾りに目をやっ たまま手を差し出した。

「何故だ？それが気に入ったのなら、持って帰ればいい。幸い、ここは空き家のようだ。置いて行っ たということは、それほど大事なものでもないんだろっ」

克己が首飾りを彼に見せながら言うと、彼は傷ついたような表情をした。そして、無理やり克己の腕から引っ 手繰ると、引き出しの中へと戻した。今度は鍵を掛けて。

「おい。ちょっと待て」

彼はまだ何か言う気かというように克己を見た。だが、克己は引き出しではなく、彼の手を見ていた。

「その鍵、どっ からだした？」

その言葉に、彼は不思議そうに手元を見た。そこには、銀色の鍵があっ た。それを見ながら、彼は首を傾げた。そして、少し考えてから言っ た。

「ここにあっ た」

そうして指差したのは、首飾りが入っ ていた引き出しの直ぐ上の所。

「何でそれが、ここの鍵だっ てわかつ た」

「？普通、引き出しの鍵は同じ引出しに入れておくものだろっ」

そう言つて、鍵を元に戻すと何事もなかったかのようにまた部屋を調べ始めた。

「引き出しの鍵は同じ引出しに。どういうことだ？　こういうものは人によつて置く場所は様々だ。だが、こいつはそこにあるのが当たり前だというように鍵を見つけた。その場所を迷いもなく。それだけ親しい間柄だったということか

克己が考え込んでいると、突然少し離れた部屋から物音が聞こえた。それは、何かが倒れるような音だった。

「何だ？」

そう思い、彼に話しかけようとするところには誰もいなかった。

「ここの住人が行方不明になつてどの位たつ？」

「確か、4日前だったはずだ」

「4日、5日で効かないんじゃないか？」

「この家は、どうしてここまで荒れ果てている？　4日、5日で

ここまで埃が積もるなんてありえない

「少なくとも見積もっても、5、6年は経っているんじゃないか？」

そうでなければありえない。だが、自分で言って彼はそれに納得した。

「そうか、そうだな。それくらい経っていれば不思議じゃないな

中に入り調べていると、ひとつの首飾りを見つけた。それは何の変哲もないものだった。

「これは

「これがどうした」

克己がそれを手に取りそう問いかけてきた。

「それを戻せ」

どうしてかはわからない。だが、克己が持っているのが嫌でそう言った。

「何故だ？それが気に入ったのなら、持って帰ればいい。幸い、ここは空き家のような。置いて行ったということは、それほど大事なものでもないんだろう」

「大事なものじゃない？違う、そうじゃない。大事だから、持ち出せなかったんだ」

無理やり克己の腕から引つ手繰ると、引き出しの中へと戻した。
今度は鍵を掛けて。

「おい。ちょっと待て」

それに克己の方を見ると、何とも言えない顔をしていた。

「その鍵、どこからだした？」

鍵？何を言っているんだ？そんなの決まっているじゃないか

「ここにあつた」

そうして、首飾りが入っていた引き出しの直ぐ上の所を指差した。

「何でそれが、ここの鍵だつてわかつた」

「？普通、引き出しの鍵は同じ引出しに入れておくものだろう」

克己は何をそんなに不思議がっているんだ？こんな当たり前前
のこと、何で聞く必要があるんだ？

そう思つて、克己の方を見ると何か考え込んでいるようだった。

「この部屋も調べたし、次に行くか。克己も、俺がいなければ
すぐに来るだろ」

そうして、彼は次の部屋に向かった。そうして、いくつかの部
屋を調べたとき、それを見つけた。

「これは、鏡？」

彼が見つけたのは鏡だった。上半分が切り落とされ、鏡面には罅が入っている。

「なんだ、これ。何か懐かしい

そう感じて鏡に触れると、自分の背後に人影が映っていた。それは、1人の少年だった。銀の髪に、緑の瞳。口からこぼれる鋭い牙。右頬に浮かぶ紋章のような痣。黒いコートを身に纏った人ではない少年。

「こいつは、あの時の

彼にはその少年に見覚えがあった。それは、彼の夢に出てきた少年だった。それを認識した途端、彼は目の前が真っ暗になり意識を失った。

「賢、どこだ！どこにいる！！」

聞こえた音は、何かが倒れた音かもしれない。だが、克己はすぐにそれを否定した。

克己は音が聞こえた途端、彼を探した。数日一緒に暮らしていたわかったが、彼は音にも気配にも敏感だ。ほんの少し音が聞こえただけで目を覚まし、安全が確認できるまでは決して警戒を解かない。気配もまた同じだ。消して近づこうとすれば、問答無用で攻撃する。そんな彼が、あの音に何の反応もしないなどあり得ない。

くそ、ぬかった。空き家の様だから誰もいないと思い込んでいた。呼んでも何も反応がないなんて、今までは一度もなかったのに！！

自分の勘違いかもしれない。ただ、聞こえないだけかもしれない。なのに、嫌な予感がした。しかも、自分の勘はよく当たる。それも嫌な予感だけは確実だ。

これもNEVERになってからだったな。今までそれに助けられてきた。だが、今回は

「賢！大丈夫か、おい！！」

数部屋離れたその部屋の中、彼は俯せに倒れていた。見つけるまでにかかったのは数分だった。だが、その時間はとても長く感じた。

「賢！賢！」

克己は彼を揺さぶったが、目を覚まさない。頬を叩いても、駄目だった。

くそっ！だが何故だ？何故こいつは倒れている。一体何があったんだ？

克己がふと何かの気配を感じて顔を上げると、そこには鏡があった。迂闊だった、入った途端彼に目がいき気づかなかったのだ。こんなに大きな姿見を。

・これは、何故こんなものが？それに、気配はここから感じる

不審に思つて鏡を睨み付けていると、いつの間にかひとりの人物が映っていた。それは一人の女性だった。人間とは思えない気配を纏い、白く長い髪に、白いドレス。銀の瞳に、右頬には紋章のような痣。胸には大振りのペンダントをしていた。

・なんだこいつは、一体どこから入ってきやがった

そう思い振り向くが、そこには誰もいなかった。驚きもう一度、鏡を見るとやはり見間違いではなく確かに彼女はそこに居た。

・どういうことだ？まさか、鏡の中に

じつと、見てみると彼女が哀しそうな表情をしていることに克己は気づいた。そして、彼女がずっと、克己が抱えたままの彼を見ていることにも。

「おい、お前は何者だ。こいつのことを知っているのか」

言葉が通じるかはわからない。だが、克己はだめもと声を掛けた。すると、今まで彼だけを見ていた彼女が顔を克己へと向けた。

「私はケイ。この子の母です」

そういうと、また彼をちらりと見たが今度はすぐに克己へと向き直った。

「母親だと？」

彼女の言葉に克己は不審そうに訊ね返した。彼女は若く、とても親子とは思えなかったのだ。だが、克己の胸中を知ってか知らずか彼女は頷いた。

「あなたがどう思おうと、この子は私の子です。大切な、命よりも大事な子」

彼女は、愛しそうに彼を見つめた。その口元には笑みさえ浮かんでいる。

・母親というのは嘘じゃなさそうだな

「お前は何者だ。賢の母親が、何故鏡の中にいる？」

克己の問いに、彼女は驚いたように目を瞠った。

「信じてくれるのですか？私が、この子の母親だと」

彼女の問いに無言で頷くと、ケイは目に涙を浮かべて喜んだ。

「ありがとうございます」

彼女が感謝の言葉を言うと、克己は興味がないのかそれには答えず先の質問の答えを促した。

「そんなことはいい。さつさと質問に答えろ」

「わかりました」

そうして、彼女は語りだした。

「私はアシュ。遙か昔、高丘の一族に封印されし種族の一人」

「アシュ？」

克己は彼女の言葉を遮り、疑問の声を上げた。それに頷くと、説明を続けた。

「アシュというのは、人間とは異なる進化を遂げた種族。その力は、悪魔や妖怪などの伝承の元になったほど。アシュにも種族があります。私はその中のひとつ、西のアシュのものです」

「アシュであるお前が、何故自分たちを封じた一族の家にいる」

彼女の説明に、アシュについて理解はしたが、そうするとなぜ彼女がここににいるのかという疑問が沸いた。

「いけないことだとは分かっていました。けれど、私と彼。高丘の末裔である高丘漢人は惹かれあいました」

「成程な。そうして生まれたのが、こいつというわけか」

そう言つて、克己は未だ気を失ったままの彼に目をやった。まだ、目覚める様子はない。

「こいつの名は、高丘映士。それで間違いはないな」

克己の言葉に、彼女は分からないと首を横に振った。

「どういうことだ？お前の子供だろう。なのに、名前を知らないのか？」

「この子は、私の知っている映士ではありません」

「それは、こいつが記憶を失っているからじゃないのか」

それに、彼女は違つと首を振る。克己は、それに苛立った。命よりも大事だと言っておきながら、自分の知っているものと違つという彼女に。

「こいつが何者かなど、俺には関係ない。こいつは芦原賢。俺達の仲間だ。お前の知っていることをすべて話せ」

「そう、あなたにはこの子が誰かなんて関係なのですね」

彼女は、寂しそうに彼を見つめた後にそう言った。

「私が、最後にこの子を見たのは6日前でした。この子は、傷こそありませんでしたがとても憔悴していてボロボロでした。そして、体を引きずるようにして鏡の前に倒れこみました。」

『なあ、母さん。仲間って何なんだろうな。俺は、あいつらのためなら何だってできた。命だって惜しくはなかった。なのに。やつぱり、俺が生きていたこと自体が間違いだったのか？あの時、ガイとレイを倒した時に、この命を絶っておけば、こんなことには』

あの子は泣きませんでした。私には、何があったのかはわからない。けれど、ひどく傷ついているのは分かりました。なのに、あの子は泣かない。泣けなかったのかもしれない。心に負った傷が深すぎて。

『こんなことになるなら、仲間になんてなるんじゃない。俺のせいで、皆まで。……もう、疲れた』

そういうと、とても疲れていたのか、眠ってしまいました。そして、目を覚ました時には、この子はこの子ではなくなっていました。そして、どこかへと行ってしまいました。

「どういうことだ？お前は、会ったではなく見たと言った。何故、見た何だ」

「私は、この子に会うことは出来ません。それが、私が犯した罪に対しての償い。我が子に辛い運命を強いる私が、どうして今更姿を現すことが出来るでしょう」

「……どうして、こいつが変わったことを知った」

「この子は、幼いころに覚醒しかけた影響で、髪の一部が銀色になっていたのです。全体の色素も薄くなり、茶色の髪色をしていました。それが、昔のような黒髪に戻っていたのです」

アシュの血から解放された証です。そう言くと、彼女は目を伏せた。克己は、そんな彼女にさらにイラついているのが自分でもわかった。今すぐにでも、鏡を破片すら残さず消し去りたいほどに。

「ふざけるなよ」

克己は、低く呟いた。

「こいつは、お前にとっては息子。高丘映士なんだろ。なのに、自分の知っているこいつとは違うから映士じゃないだろ？お前は、自分の息子を否定している」

「そんなことはありません！」

「あるんだよ。名前を否定するということは、その人物を否定するも同じ。お前は、母でありながら、息子を否定したんだよ」

克己は決して声を荒げるわけでもなく、淡々とした口調で告げた。

「それに、罪を犯したからこいつの前に出れないだろ？そんなのは、ただの言い訳だ。お前は怖いだけだ。本当に母親だというのは、何故こいつを高丘映士と認めない。こいつをこいつと認めないお前に、母親の資格はない」

そういうと、克己は気絶したままの彼を抱え部屋を出ていこうとした。

「待ってください。どうか、その子を、映士を助けて」

「ふん、俺は映士とやらを助ける気はない。俺は、仲間である芦原賢を助ける。こいつの記憶とやらは、随分と厄介な代物らしいからな」

彼女の悲痛な言葉にそう返すと、今度はその部屋を、屋敷を後にした。

情報整理（前書き）

遅くなりましたが更新します。ストックがなくなったので、更新遅くなります。

情報整理

「克己、賢。おかえりなさい。どうしたの？」

克己が彼を抱えて部屋に入ると、マリアがお茶を準備して待っていた。そして、2人を見ると微笑みながら、そう言ったが、彼が意識を失っているのを見るとすぐにそばに駆け寄ってきた。

「ああ、ただいま。悪いが、部屋を用意してくれ」

克己が彼に目をやり言うと、彼女は頷きすぐにベッドを用意しに行った。克己も、その後を着いて行き彼を寝かせた。そして、命に別状がないことを確認すると部屋へと戻った。

「それで、何があったの？」

彼女は、どこか沈んでいる克己に向かって紅茶を出しながらそう訊ねた。克己は出された紅茶を一口飲むと、言った。

「あいつの本名が分かった。あいつの名は高丘映士、人間と人外のハーフだ」

「ちよつとそれ、どういうこと？」

「あいつが人間じゃないって、マジかよ」

克己の言葉にマリアが首を傾げると同時に、扉が開き京水と剛三が入ってきた。

「静かにしなさい。賢が起きてしまっわ」

マリアが2人を窘めると、2人は口を噤み、手に持っていた資料をテーブルに置くと、空いている席に座った。

「あいつ、また倒れたのか？」

「ええ、詳しいことは分からないけど帰ってきたときにはもう気を失っていたわ」

そういうと、マリアは心配そうに隣の部屋へと続く扉を見つめたが、すぐに克己へと視線を戻した。

「それで、人外って何の冗談なの？」

「言っておくが、言葉通りの意味だ。アシュという種族をしているか？」

「亜種。生物の分類区分で、種の下位区分のこと。それがどうかしたの？」

マリアは、アシュと聞いて亜種と思ったのかそう言った。だが、克己は首を横に振るとまた紅茶を啜った。

「あいつが言うには、アシュとは人間とは別の進化を遂げ、悪魔や妖怪の伝承の元になった種族だと言っていた」

「あいつ？その家に誰かいたの？」

「ああ、賢の母親だと名乗る女だ」

克己は忌々しそうに吐き捨てると、カップを握りしめた。

「どういうこと？母親って、人間なの？」

「いや、違う。あいつは、自分がアシュだと名乗った」

克己はそう言って、高丘邸での出来事を語った。

「じゃあ、やっぱり高丘映土と賢ちゃんは同じ人物だったのね」

克己の話聞いた京水は、納得したように頷いた。剛三も、同じように頷き、持ち帰った資料を2人に渡した。

「内容は剛三が見つけたのと同じようなものだけど、ちゃんと写真つきよ」

「確かに、あの女の言っていた特徴と一致する」

克己は、渡された資料を読み進めていると、どんどん眉間に皺が寄ってきた。

「どうにも信用できないな。お前たちは、直接SGSの連中に会ってどう思った」

克己の言葉に、まずは京水が。

「信用出来ないわね。賢ちゃんが機密を持ち逃げした、って言うってんだけど彼の様子を見る限りは嘘ね」

「その根拠は何？」

「もちろん、女の勘よつ、と言いたいとこだけど。ほら、賢ちゃん言つてたじゃない。自分のせいであたし達を死なせたくないつて。そんな子が、仲間を裏切つて逃げると思う？」

京水は、ありえないと言うように言い切つた。その勢いに、剛三は驚いたが自分も同じ思いだった。と、克己は剛三に同じように聞いてきた。

「俺も京水の意見に賛成だ。あのお人好しの弱虫が、んなことするか。第一、あいつらはその4人と賢が持ち出したつて言つてたものについて何の説明もないんだぜ。それなのに信用できるかってんだ」

そう吐き捨てるように言うと、彼はSGSに渡された資料を睨んだ。

「確か、プレシヤスだったわね」

マリアが言うと、一斉に視線が集まつた。それは、何か知つているのか？と問いかけるものだった。彼女は、詳しいことは知らないわと前置きすると言つた。

「発動すれば、人類の存亡さえも左右する危険な古代の遺産じゃなかったかしら？昔、知り合いに聞いたただだからはつきりしたことはわからないけど。もし、それが実在していたのなら」

そこで、マリアは言葉を切つた。皆、言いたいことは分かっていた。だが、それを否定するように剛三は笑い飛ばした。

「つけ、んなもんある分けねえだろ。何百年前の人間に、そんな大層なもんが作れるかよ。お伽話だろ

「そうとも言い切れないわ。第一、何百年なんてレベルじゃなく下手をすれば何千年単位の話よ。それに、これを否定するなら賢がアシュとのハーフだという話や、ネガティブについても否定することよ」

マリアがそういうと、剛三は不貞腐れたようにそっぽを向いてしまった。

「まあ、今のところ分かっているのは賢ちゃんの本名が高丘映士だということ。アシュとのハーフだということ。SGSに裏切り者として追われていること。前任の4人と何らかの関わりがあること。そして、4人と今の5人、そのどちらかが賢ちゃんが仲間だと思っていること。この5つね」

そうだな、と克己は頷くと少し考え込んだ。3人は、克己の言葉を待っていた。

「さて、どうするか。依頼としては舐めているとしか思えないが、賢について後々憂いを残さないようにするには受けてみたほうがいいな

「お袋は、知り合いとやらにそのプレシヤスについて聞いて調べられるだけ調べてくれ。この依頼、受けるぞ」

話し合い（前書き）

間空きましたが投稿しますが、もしかしたらそのうち書き直すかも
しれません。

話し合い

彼は、また暗い空間にいた。ここには何もない。この間は、嫌な声が聞こえた。でも、ここから出たくない。なんだか安心する。

彼が、その場所に蹲っていると声がした。

『ねえ、君はどうしてここにいるの？』

- どういうことだ？俺は、もっとここに居たい

『君は、此处に居てはいけない。早く戻るんだ』

- 何故？お前だってここに居るじゃないか。お前も俺を否定するの？

『違う、そうじゃない。君には、生きて幸せになって欲しい。だから』

- 生きて？俺はもう死んでいる。だから、別にいいだろ。それに、行くならお前も

『僕はいいい。君が生きていくのに、僕はいない方がいいんだ』

彼が目を覚ますと、そこはベッドの上だった。だが、自分の部

屋として割与えられている場所ではない。それに首をかしげていると、扉の方で人の気配がして視線をやると、克己に京水、剛三が入ってきた。

「起きたようだな。早速だが、仕事だ」

そういうと、克己は資料を渡してきた。

「依頼主はSearch・Guard・Successor、通称SGSだ」

「SGS?どこかで

「内容は？」

疑問に思いつつも尋ねると、気乗りしないように言った。

「どうしたんだ？そんなに嫌な依頼だったのか？」

「対立している組織、通称ネガティブの抹殺。そして逃亡者、高丘映士の捕獲」

「ダークシャドウ、ジャリユウ一族、そして最速の狩人？」

「ダークシャドウとジャリユウは分かるが、この最速の狩人に古代の巫女、空の頂、深き知恵者ってなんだ？こいつらはチームなのか？」

「向こうの話によると、その4人は元SGSの職員だったらしいんだけど何らかの罪を犯して首になっただけらしいの」

「それに、その時プレシヤスを5つ盗んだらしい」

そう言つて、剛三は自分の分の資料を睨み付けた。京水も嫌そうな表情をした。

何かあつたのか？

「盗まれたプレシヤスは、『闇の三つ首竜』、『レムリアの太陽』、『虹の反物』、『亡国の炎』、そして、『百鬼鏡』」

「何だつて、何でそんなもの。早く、早く取り戻さなくては。彼らが危険だ！」

どうしてかはわからない。だけど、彼は焦つたようにそう言つて立ち上がるうとした。今にも部屋を飛び出して行きそうだった。

「知っているのか？そのプレシヤスについて」

克己が問うと、はつとしたような表情になり彼は動きを止めた。

「確かに俺はそのプレシヤスを知っている。だが、何故？」

彼は戸惑いつつも、頷き答えた。

闇の三つ首竜は、宇宙の彼方から闇のエネルギーの塊を呼び寄せるプレシヤス。心に強い闇を持ち、その波長が共鳴する者を主と選び、その者に強大な闇の力を授ける。

レムリアの太陽は、古代レムリア文明で作られた、巨大なエネ

ルギーを持つ強力なプレシヤス。その力は、人をコールドスリープにすることも、逆に命を奪い取ることも出来る。

虹の反物は、古代に陰陽師が妖怪退治に作った反物。纏った者の思念を読みとり、どんな衣装、姿にも変わることが出来る。単に姿が変わるだけでなく、その姿に応じた能力やスキルが簡単に身につけられる。

亡国の炎は、永遠に消えることのない強力な炎。呪術師が邪悪な呪いをかけた人の油を燃やして作ったもので、大きく成長して国一つを焼き尽くすと言われる。

そして、百鬼鏡。アシユのいる百鬼界とこの世を繋ぐゲートの役割を果たす鏡。鏡面に人間の血を僅かに与えるだけで、鏡面がゲートとして開く。

話し終わると、彼らは黙ったままだった。剛三は、そんな危険なものだとは思っていなかったのかあいた口が塞がらないし、京水も目を見開いている。克己も眉間に皺を寄せたままだ。

「あいつらはそんなものを盗んで何をしようとしているんだ？」

「確か、百鬼鏡は壊れて使えないはずだ」

「使えない？じゃあ、盗った意味ねえじゃねえか」

「彼らは何故、そんなものを盗んだのかしら？」

みんなは首を傾げた。だが、それを断ち切るように克己が手を叩き自分に注目させた。

「そのことは今は置いて置け。とにかくSGSの依頼は受ける。だが、ただ受けるだけじゃない。依頼を受けながら、その4人について調べる。そして、SGSについてもだ。奴ら、何かを企んでやる」

克己はそういうと、明日皆でSGSに行くと言った。

「賢、お前は棍と銃どっちがいい？」

剛三の言葉に彼は首を傾げた。

「持つてく武器だよ。俺達は傭兵だ、何があってもいいように武器は持つておくべきだろ。で、お前はどっちも使えるだろ？だからだよ」

「なるほどな。確かに、いつ敵と遭遇するかわからない。克己はナイフ、京水は鞭、剛三は棍だったな。なら、俺は」

「銃を借りれるか？元々そのつもりで俺を仲間にしたんだろ」

彼がそういうと、京水は武器のある場所に案内すると言い、彼はそれについて部屋を出た。

「なあ、克己。あいつ、もしかして忘れてるのは自分に関してだけじゃねえのか？」

2人の気配が完全に離れたことを確認して、剛三がそう言った。

「あいつが嘘を吐いてると思えねえし、実際自分に関しては」

何も出てこねえ。だが、他のことは分かる」

剛三の言ったことは、克己も考えていた。

「もしかしてだが、賢の記憶喪失は精神的なものかもしれないな。強く自分を消したい、忘れたい。そう思ったことで、記憶は消えた。一種の自己暗示のようなものだ。だから、それ以外は覚えている」

克己の考えに、剛三は成程と頷いた。確かにそれなら、ありえなくもない。

「とにかく、まずは明日だ。さっさと準備をしておけ」

そうして、2人もまた準備をしに行った。

登場人物・設定（前書き）

タイトル通りです。ネタバレになります。書いているうちに、一部変更するかもしれません。

登場人物・設定

・大道克己

NEVERのリーダー。性格は、冷静沈着で頭が切れる。自分で決めたことは、最後までやり通す。酷薄なようであり、情に厚い。人を挑発するような言動を度々する。人は、あまり好きじゃないが、母親と自分と同じネクロ・オーバーは別。仲間とはことんまで信頼する。絶対に裏切らない。サバイバルナイフを使った戦闘が得意。

京水は優秀な参謀にして、情報収集係り。剛三は、直情型で馬鹿だがお人よし。賢は、無表情だが感情が豊かで自分よりも強いかもしれない。と思っている。

・泉京水

NEVERのサブリーダー。飄々としたオカマで、克己LOVE。見た目に反して、知恵が回り、情報収集能力が高い。そのネットワークは、克己でさえ舌を巻くほど。鞭を使った中距離、プロレスなどの戦闘が得意。

克己は、自分の命を預けられるリーダー。剛三は、好みじゃないがお人よしのいい人。賢は、タイプではあるが何考えているかわからない。とおもっている。

・堂本剛三

NEVERのパワーファイター。直情型だが、馬鹿ではない。だが、言動からよく馬鹿だと思われる。お人よし、世話焼きタ

イブ。棍棒による力押しの戦闘が得意。

克己は、信頼できるリーダー。京水は、オカマだが腕は確かでおカマであることさえ目をつぶればいいやつ。賢は、何を考えてるかわからないうえ、無表情だがほおっておけない。

・芦原賢

新しいNEVERのメンバー。記憶喪失で、自分のことは名前さえも覚えていない。とりあえず、持っていた身分証の名前をなめる。記憶喪失だからなのか、表情が乏しいが感情は豊。だが、克己以外にはあんまり気づかれない。無意識のポーカrfフェイス。棍による近距離、銃による遠距離、素手での戦闘などなんでもこなす。

克己は、自分のことをわかってくれる、仲間にしてくれた人。京水は、話好きな人。剛三は、素人だが伸びそうで面白いと思っている。一度殺しかけたことで、負い目を感じている。

NEVERのメンバーは、お互いを信頼も信用もしている。賢に対しても、まだよくわかってはいないが、敵だとは思っていない。克己の眼に間違いはないと思っている。

・明石暁

SGSの宇宙探索専門員。唯一SGSに残っている人物。ゲキレンジャーとの共闘後、また宇宙探索にでた。その後、一度も地球には戻っていない。連絡は定期的に行っている。次世代の者たちとは何度か、通信しているがあまりよく思っていない。急にやめた4人

と、連絡の取れない映士を心配している。

・西堀さくら

西堀財閥令嬢。元ボウケンピンク。次世代メンバーにより、SGSを追われた。今は、財閥の力を使いSGSの動向を探っている。もし後ろ暗いところがあれば、すぐに告発するように準備している。A・SASのサブリーダー。

・最上蒼太

フリーの情報屋。元ボウケンブル。次世代メンバーにより、SGSを追われた。元スパイの情報網を使いSGSの活動及び映士の行方を追っている。証拠さえそろえば、潰し映士を助けだせるよう準備している。A・SGSの参謀。

・伊能真墨

トレジャーハンター。元ボウケンブラック。次世代メンバーにより、SGSを追われた。トレジャーハンターとしての腕を生かし、彼らとプレシヤスの争奪戦をしている。SGSを潰し、映士を助けたそうとしている。A・SGSのリーダー。

・間宮菜月

真墨の相棒。元ボウケンイエロー。次世代メンバーにより、S

G Aを追われた。レムリアの力である予知能力を使い、S G Sの行動を読み狙っているプレシャスを伝えている。また、どうすることが一番いいか最後の判断は彼女が担っている。S G Sがもとの正義の組織に戻ることを願っている。A・S G Sのメンバー。

・レオナ

元S G Sのトップ。ボウケンジャーの司令官、Mr・ボイス。次世代メンバーにより、S G Sを追われた。レオン・ジョルダーナの転生。その知識でA・S G Sのサポートをしている。自らが生み出した過ちを正すため、S G Sを潰し、映士を助け出すとしている。

・牧野守男

元S G Sの機械技師。次世代メンバーにより、S G Sを追われた。次世代メンバーに対抗するための武器を作り、彼らに提供している。A・S G Sのメンバー。

・A・S G S

Anti・Search・Guard・Successorの略。文字通り、対S G Sのために元ボウケンジャーのメンバーが作り出した、新しいネガティブ組織。目的は、S G Sをこれ以上道を踏み外させないこと。ボウケンジャーをもとの正義の組織に戻すこと。そして、S G Sに捕まったままの映士を助け出すこと。明石も

残されているが、彼は宇宙にすることでひとまずは無事なのでとりあえず最初の2つが優先。SGSを追われるまでは映士のサポートをしていた。

・幻の月光

ネガティブ・シンジゲート、ダークシャドウの頭領。ボウケンジャーは商売敵だったが、その強さと信念は認めていた。それ故に、今のボウケンジャーは認めない。A・SGSには協力している。

・風のしずか

ダークシャドウの幹部。蒼太とは友達以上恋人未満。A・SGSに協力している。月光と同じく、今のボウケンジャーは嫌い。

・ジャリュウ一族

リユーオンが率いていたネガティブの生き残り。同じネガティブであるダークシャドウがA・SGSに協力したため、成行きで自分たちも協力している。でも、別にA・SGSのメンバーが嫌いではない。今のボウケンジャーのほうが嫌い。

・高丘映士

SGSの秘密組織、ボウケンジャーのシルバー。次世代メンバーが他の4人を追い出したとき、映士だけはその出自により利用で

きると考え、他の4人に対する人質としても残された。最初は抵抗していたが、仲間を殺すと脅され抵抗できなかった。明石が何も知らないで元気にやっていること。仲間が無事なことが支えだった。A・S G Sのことは知らなかった。次世代メンバーに、全部の罪を着せられて追われた。その時、A・S G Sのメンバーに助けられたが、逃げ切れず殺された。

・夏木葉 なつきよう

次世代ボウケンジャーのチーフ。先代を嵌めた張本人。表向きは明石と同じ冒険好きの好青年だが、実際は自分が冒険を成功させるためなら仲間でさえも犠牲にする。

・東之宮秋乃 ひがしのみやあきの

次世代ボウケンジャーのサブチーフ。さくらと同じく、東之宮グループのお嬢様。桜とは違い、自分の権力をフルに活用してこうと決めたことはどんなことでもやる。プライドが高く、相手を見下した言動をする。

・高野神無 たかのかんな

次世代ボウケンジャーのイエロー。元アイドルの少女。無邪気で残酷なことを平気で言う。悪気がないが、自分が一番かわいいと思っている。それ以外は、引き立て役。

・木之内冬樹
きのうちふゆき

次世代ボウケンジャーのブラック。真墨と同じく元トレジャーハンター。彼とは違い、冒険には興味はなくその目的はプレシヤスを自分のものにする。A・S・G・Sに獲られたふりをしてパクすることもある。

・木之内春樹
きのうちはるき

次世代ボウケンジャーのブルー。冬樹の双子の弟。パソコンに強い。springと名乗るネット犯罪者。S・G・Sの機密情報からボウケンジャーに関して、果てはプレシヤスまでも売り捌いている。

・レオ

次世代ボウケンジャーの司令官。ボイスとは違い、直接その姿をみんなの前に見せている。レオン・ジョルダナーの転生を名乗る。

次世代ボウケンジャーのメンバーは、自分たちの方がボウケンジャーに相応しいと前のメンバーを追いつ出した。だが、実際は任務はすべて映士任せで自分たちは彼が敵を倒したり、トラップを解除した後プレシヤスと取りに来るだけ。失敗はすべて映士の責任にしていた。また、映士はアシユの混血だということで化け物扱いや、

人体実験のモルモットとしていた。

再会

「依頼を受けてくださったこと、ありがとうございます、NEVERの皆さん」

SGSのサロン。そこで、NEVERとボウケンジャーが顔を合わせた。

「あなたがリーダーの大道克己さんですね。そして、サブリーダーの泉京水さん、堂本剛三さん、そして芦原賢さん」

にこにこ笑顔を作りながら、15才程の少年が俺達を見ながら言った。

「僕はレオ。ボウケンジャーの司令官、Mr・ボイスです」

「ほう、こんな子供が司令官とはな」

克己が少し驚いたように言うと、レオは意外ですかと聞いてきた。

「意外だが、別に珍しくはない」

レオの言葉に、克己はそっけなく答える。別段何のことない、なんてことない会話のはずだ。けれど

- 何だ？いきなり寒くなったような

彼はそう感じジャケットのファスナーを少し上げた。それに気

づいたのか、京水が彼に寒いのかと聞いてきたので首を振る。

克己と剛三は、SGSの面々が彼の視界に入らないようさりげなく動いた。それは、京水が彼に話しかけたのとほぼ同時だったため、彼は気づかなかった。

「初めに言っておくが、仕事の時以外の行動は自由にさせてもらおう」

そういうと、レオは分かりましたと頷いた。だが、ただしと続けた。

「地下にある研究室。そこには絶対に入らないでください」

「何か、疚しいことでもあるのかしら？」

京水が探りを入れるように聞くと、レオは苦笑気味に首を横に振ると言った。

「そういうわけではありませんよ。そこでは手に入れたプレシヤスの研究をしているのですが、プレシヤスというのは危険なものです。僕たちも滅多なことではその場所には近づかないのです。ですから、皆さんも近づかないでほしいのです。まあ、命が惜しくないのなら別ですが」

そんなことを話していると、突然サロンに警告音が響いた。

「何だ？」

NEVERはすぐに警戒態勢をとったが、ボウケンジャー達は

慣れているのか慌てることもなく、言った。

「たくつ、またかよ」

「ほんと、彼らも飽きないよね」

警告音が消えると、モニターに地図が映し出された。そして、D・S、A・S・G・Sの二つの文字が。

「ふーん、今回はこいつらか。レオ、今回の奴らの狙いは？」

「恐らくは、天叢雲剣。神代の時代、素戔鳴尊が大蛇を退治した際に手に入れたと言われているものだ」

「なるほどな。じゃあ、ボウケンジャー、ATTACK!」

葉が指を鳴らす。それと同時に彼らは動き出した。

「ほら、あんたたちも早く来いよ」

春樹はそう声をかけ出て行った。

「あんたは行かないのか？」

「司令官だからね」

克己は、残ったままのレオに尋ねると彼は何を当たり前のことをと言っように言った。

「君たちも早く行きなよ。じゃないと、仕事になんないじゃん」

そう言つて、彼は椅子から立ち上がると地下に避難しようと言つて出て行つてしまった。

・最悪の司令官だな

彼はそう思い、レオの出て行つた扉を見た。すると、舌打ちが聞こえ音のした方を向くと、剛三が苦虫を噛み潰したように扉を見ていた。彼だけではなく、克己も京水も同じような表情をしている。

「何よ、あれが司令官を名乗るものの態度なの？」

「プロフェッサーの爪の垢を煎じて飲ませてやりてえぜ」

「ふん、あんな奴とお袋を一緒にするな」

行くぞ、克己の言葉に彼らもまた部屋を後にした。

「おい、何やってたんだ！」

4人が現場に着くと、そこではすでにボウケンジャーとネガティブが交戦していた。1人は、ダークシャドウの幹部風のしずか。もう1人は、最速の狩人・伊能真墨。そして、人とは違う異形おそろくは資料にあったツクモガミだろう。その姿は、ボウリングの玉

の顔に、ボウリングのピンの角、エアコンに、団扇など色々なものが混ざった姿をしている。

「何よ、あんた達。あの偽物の仲間なの？」

「偽物？」

「そうよ、あいつらはボウケンジャーの偽物よ」

風のしずかは、ブルーとブラックの攻撃を受けながら2人を睨み付ける。真墨も言葉には出さないが、同じくピンクとレッドの攻撃をいなしながら睨み付ける。唯一ツクモガミだけが、何かこそこそしているがそれをイエローが追いかけていた。

「偽物とはどういうことが、詳しく聞きたいものだな」

克己は、直ぐにボウケンジャーの助太刀はせずに2人に向かつてそう訊ねた。

「おい、敵の言うことなんかいちいち聞いているな」

「そうだよ。雇い主は僕たちだよ」

ブラックとブルー。声からしてブラックが冬樹で、ブルーが春樹だろう。彼らが、そう叫んだ。

「仕方がない。京水は女の方に、剛三は男の方の相手をしろ。

賢は俺と一緒にあのガラクタの塊だ」

克己は呆れたように溜息を吐くと、そう指示を出した。3人は

それぞれ頷くと、相手へと向かって言った。

「はいあい、お嬢ちゃん。この2人に変わって、あたしが相手になってア・ゲ・ル」

「気に入らねえが、克己の指示だからな」

2人がそれぞれの敵の前に立つと、ボウケンジャーはすぐ从这里から離脱し、プレシヤスのあると思われる方へと行ってしまった。勿論イエローもだ。

「お前ら、邪魔をするな!」

「そう言われても仕事何でな」

剛三がそう答えると、真墨は苦虫を噛み潰したような顔をして、怒鳴った。

「ふざけるなよ。お前らわかってんのかよ? あいつらはプレシヤスのためなら、どんな卑怯な手でも使う奴らだぞ。人の命でさえも」

「そうよ、あいつら自分の仲間でさえも犠牲にしたのよ」

真墨の言葉は、最後には小さくなり俯いてしまった。しずかは、そんな彼に目を向けながら悲しそうな声で言った。

・ どうして、そんなに悲しそうな顔をするんだ? あいつらにとって、ボウケンジャーは敵のはず。なのに

彼がそう思っていると、克己が彼にツクモガミの傍にるように言くと2人に向かって一歩踏み出した。

「その話し、詳しく聞かせてくれないか？」

「その話し、詳しく聞かせてくれないか？」

克己の言葉に、2人はどういふことだと言つように彼の方に視線を向けた。

「俺達の雇い主は確かにSGSだ。だが、俺達は奴らについて詳しくは知らない。だから、教える。お前たちの知っていることを」

克己は、じつと彼らを見つめて言った。それに、彼らは戸惑った。彼らは敵のはず、雇われたと言っていたから間違いはない。なのに、何故そんなことを。

「高丘映士。その名前を知っているな」

その言葉に、2人。とくに、真墨の表情に動揺が走った。

「お前、どこでその名前を！」

真墨は克己に掴みかかろうとしたが、剛三が阻んだ。しずかも

思わず動こうとするが、それは京水が。

「それは言えないな。だが、俺はそいつを救うつもりだ」

それに、真墨が目を大きく見開いた。その表情は、信じられないと語っていた。

「今は引け。日を改めて、話し合おう」

そう言つて克己は、彼に1枚の紙を渡した。2人はどうするかと戸惑っていたが、ふと1人離れていた彼を見て驚くと頷き彼に向かつて囁いた。

「明日の昼、スクラッチ社のカフェで」

そう言つて、その場を後にした。

「ねえ、皆何してるの?」

彼が、成行きを見守っているとふと下の方で声がした。見ると、ツクモガミが不思議そうに彼を見上げている。

「さあな」

「何だ、こいつ。俺が敵だとわかっているのか？」

「お前、名前はあるのか？」

「ねえねえ、どうして高丘はあの人たちと一緒にいるの？」

彼が不思議に思っていると、それには答えずまた質問をしてきた。

「あの人たち？」

「うん。あの黒いジャケットの人たち」

彼は、どういふことかと首を傾げる。自分たちの仲間に高丘という名の者はいない。では、一体誰のことなのか？

「ねえ、高丘。どうして」

また、尋ねられ、彼はようやく高丘問う名前が自分を指すことに気が付いた。念のために確認するとツクモガミは嬉しそうに何度も首を縦に振った。

「そうだよ。高丘は高丘だよ。おいらの友達だよ」

それに、彼は戸惑った。ツクモガミは自分をその友達と思っている。でも、自分は違う。彼の友達なんかじゃない。俺は、彼のことなんか知らない。

「俺は、知らない。俺は賢、芦原賢。NEVERの1人だ」

「違うの？」

彼が頷くと、そつかとツクモガミは落ち込んだようだったが直ぐに顔を上げると言った。

「おいらはアクタガミ。ダークシャドウに創られたツクモガミ、よろしくね」

アクタガミの切り替えの早さに驚いていると、彼は何かに気付いたのか嬉しそうに手を振っている。彼の視線の先に目を向けると、そこには驚いた表情をした2人がいた。

一体何に対して彼らは驚いてるんだ？

不思議に思っ、じっと見ていると彼らは何かに納得したように頷き、克己に対して何か囁くと踵をかえた。

「あつー、待ってよ。置いてかないで」

それを見たアクタガミも、慌てて彼らを追いかけた。彼が追いつくと、2人は仕方がないと言うように彼を待ちそして帰って行った。

それを見た彼は、何か心に痛みが走った気がしたが同時に温かいなにかも感じた。

あいつ、居場所を見つけられたんだな。よかった。けど、俺は

「おい、帰るぞ。賢」

じつと、3人が帰った方向を見つめていると克己がそう声を掛けた。

「早く帰ろうぜ、腹減っちゃった」

「もう、仕方がないわね。賢ちゃんも早くいきましょ、最近いいお茶が手に入ったのよ」

剛三も京水も、そう言って笑いかけた。彼も自然と笑みを浮かべると、彼らの方へと歩みを進めた。

「そういえば、あいつらは良いのか？」

「別にかまわないだろ。依頼を受けるとは言ったが、敵がいなくちゃ何もできん。それに、あいつらを守ると言うのは契約内容には入っていない」

そう言って不敵に笑うと、彼の頭をひとつ叩き歩き出した。S GSではなく、アジトに向かって。

再会（後書き）

設定を追加します。

・アクタガミ

映士に頼まれた仲間たちが時折様子を見に行っていたが、映士がいなくなったのを知り自分から仲間にさせてもらえるように頼み、再びダークシャドウに戻った。

真実（前書き）

間が空きましたが、投稿します。

真実

「あいつら、勝手に帰りやがって。今度会ったら絶対文句言つてやる」

「まあまあ、落ち着いて。プレシャスはこうして手に入つたんだし、良いでしょうよ」

サロンに着いた途端に不機嫌そうに文句を言う冬樹に、春樹はプレシャスボックスを抱えて苦笑した。

「春樹の言うとうりです。そんなことでいちいち文句なんて言わないでください」

「うつわゝ、秋乃さん冷たい。でも、あの人たちがっこいいよね。神無は、克己って人と賢って人がタイプだな」

そう言つて、神無はうつとりとした目で宙を眺めた。それに、またかと言つように秋乃は溜息を吐く。

「だが、少し注意は必要かもな」

葉が不意にそう言った。その言葉に、待ってましたと言つように冬樹と春樹が笑った。

「必要な情報は、すぐに集めるよ」

「芦原って奴が狙い目だぜ。一番、弱そうだ」

春樹の言葉に、神無はえ〜と不満そうな声を上げる。それに、彼はにっこりと笑うところだった。

「神無ちゃん、芦原さんと二人っきりにしてあげようか？」

「本当!!」

彼女はぱつと顔を明るくすると、ありがとうと春樹に抱きついた。神無からは、見えていなかったが彼は嗤った。彼だけではなく、3人もまた。

「おい克己、ほんとにここで会ってるのか？」

「向こうで指定してきたんだ。間違いはないだろう」

剛三は、隣でコーヒーを飲んでいる克己に不安そうに尋ねたが彼は特に何も思うことがないのか表情一つ変えない。だが、剛三はそれでも納得しない。彼らがここに来てから、既に1時間以上が経っていた。

今日ここにきているのは、克己と剛三の2人だけ。京水と彼は、SGSに待機している。京水には、昨日レオが言っていた部屋の調査を頼んである。

そうして、そろそろ一時間半が経とうとしたとき警告音が鳴り響いた。

「何だ？」

驚き、辺りを警戒すると窓の外に明らかに人ではない者が見えた。そいつらは、白い姿で手に手に鎌を持ち暴れまわっている。

それに他の客も気づいたのか、口々に悲鳴を上げその場はパニックに陥った。そんなとき、入口に青いジャケットの若い青年と紫のジャケットの少し年上の青年が入ってきた。

「みなさん、落ち着いてください！」

「俺達は此処の職員です。安全な場所まで誘導しますので、指示に従ってください」

その言葉に、客は皆戸惑いながらも彼らに従い避難していった。彼らも今日はもう無理かと避難の波に紛れようとした。だが、その時彼らの腕を掴む者があった。何だと振り向くと、そこには先程客を誘導しに来た2人と同じ赤いジャケットを着た青年がにこにこと無邪気に笑っていた。

「見つけた。お前、明石の仲間だろ。一緒に来る」

そう言っで、2人を引きずるように連れて行った。2人は、何

とか外そうとするがどこにそんな力かと思うぐらい強い力だった。

「猫、みんな、あいつらが言ってたの連れてきた。こいつら、ゾワゾワじゃない、ニキニキだ」

「あー、すまなかつの。こやつに悪気はないんじゃない」

彼に連れてこられた室内、そこにいたうちの1人。猫の着ぐるみを着たような男が、克己と剛三に災難だったなというような目で彼らを見た。

「てゝっ、何だよお前ら。いきなり引っ張ってきやがって」

勢いよく入った時に頭をぶつけたのか、後頭部を抑えながら剛三が怒鳴った。

克己はそんな彼をしり目に、室内を見渡した。そこに居たのは、先に声かけた猫と30から40代くらいの女性。2人をここまで引きずってきた彼と同じくらいの黄色のジャケットの女性。そして、飼い猫なのか3匹の猫がそこに居た。

「なあ、なあ。俺、ジャン。お前はなんていうんだ？」

状況を把握しようとしていた彼に、赤いジャケットの青年・ジャンがにこにここと尋ねた。

「お前は、伊能真墨の仲間か？」

克己はジャンの質問には答えず、訊ねた。剛三もすぐに、武器を手にして周りを睨み付けた。

「そう警戒しなくてもいいじゃない。感じ悪いわね」

「感じが悪くて結構。俺達は、お前たちにどう思われようとも何とも思わん」

克己がそういうと、背後の扉が開き先ほど客を避難させていた2人と、もう1人白いジャケットの青年が入ってきた。

「おつ、うまく連れてこれたようだな。偉いぞ、ジャン」

紫のジャケットの青年が、そう言っでジャンの頭を撫でた。それに、彼は嬉しそうに目を細めた。

「おまえら、悪かったな。どうしてもあそこで話すわけにはいかなかったからな。多少強引な手を使わせてもらった。俺は、深見ゴウ。こいつは、漢堂ジャン。そっちにいるのが、弟のレツ、宇崎ラン、久津ケン、俺達の師匠のマスターシャーフー。そして、サポートの真咲美希だ」

そう言っで、ゴウは一人ひとり紹介していった。それに、克己は溜息を吐くと自分も名を名乗った。

「大道克己だ」

「堂本剛三」

剛三も不機嫌そうではあるが、名乗るとジャンは2人を興味深そうに見ていた。何か言いたくてうずうずとしているのが一目でわかる。

「なあ、お前達ゾワゾワじゃない。けど、似てる。どうしてだ？」

ジャンは、不思議そうに首を傾げると彼の言葉に反応した6人がすぐさま戦闘態勢に入った。

「ゾワゾワってことは、臨獣殿！」

「あなたたち、リンリンシなの？」

そう言っ、彼らは2人を睨み付けた。だが、それをジャンがキョトンとした顔で言っ

「レッ、ラン、違。似てるだけだ」

「そのリンリンシーとなんだ？」

「俺達はそんなものじゃないぜ」

3人の言葉に、全員どういことかと首を傾げた。

「第一、お前たちは何者だ。俺達は、伊能真墨に呼ばれて此処に来た。肝心の本人は何処にいる」

「こいつら、悪い奴じゃない。ゾワゾワしない」

「お前が言っなら、間違いはないんだろうな」

レッはそういっ、部屋の隅でじつとやり取りを見ていた猫を

抱えると2人の前に降ろした。

「おい、猫なんか連れてきてどういうつもりだよ。早くあの黒いを出せ」

「黒いのっていうな!!」

剛三がそういうと、いきなり怒りを帯びた声が聞こえた。驚いてそちらを見ると。今まで猫がいた場所に3人の人物が立っていた。

「もう、落ち着きなよ真墨」

「そうですよ、今日の目的は話し合いです」

2人が宥めるようにいうと、真墨も渋々と頷いた。克己と剛三は、一体彼らがどこからやって来たのかと考えていたが、ふと彼らの手にピンクかった布があるのに気付いた。

「なるほど、それが虹の反物の力ってことか」

「これを知っているということは、やっぱりあいつは」

真墨は、克己の言葉を聞いて確信した。あの時、こいつらと一緒にいたのは間違いなく映士だと。奴らは、自分たちが持ち出したうちのひとつ虹の反物について無関心だ。データがあったとしても把握しているわけではない。

「話がしたいと言ったな。何が聞きたい」

「お前たちが高丘映士と呼ぶあいつに、何があったのか」

克己の問いは、簡潔だった。目的は、確かにそれだけなのだろう。だが、真墨はその眼の奥に炎が見えた気がした。静かに燃える、青い焰を。

「いいだろう。あれは、3年前」

そう言つて、真墨は当時を思い出すように話し始めた。

- 俺達は、明石が再び宇宙探索に飛び立つてからもボウケンジャーとして活動していた。変わったのは、チーフが明石から俺に代わり替わったことと映士の奴が、レスキューとボウケンジャーの両方を兼任していたことだけだ。

ネガティブの奴らも、ガジャが眠ってから動きが沈静化していったから映士もほとんどレスキューメインで活動してたがそれでも、4人でやっていけた。ほんとにやばい山の時は、あいつも忙しくても必ずきてくれたし、仕事のない日はいつも一緒だったからな。俺たち5人の関係は変わらなかった。プレシヤスを守って、終わったら一緒に帰って、ばかやって。

けど、上層部の奴らはそうは思わなかった。ほんとに、明石と姐さんが宇宙に行った辺りから増員するように言われてたらしいんだが、当時の司令官だったボイスと牧野さんが止めてくれてたんだ。彼らの絆は強い。彼らにとって仲間は、今のメンバーだけだ。レッドもピンクも同じ。明石暁と西堀さくらしかない。もし増員するのなら、本当に必要なときか彼らがボウケンジャーを止めたときだ。

もしそうしないのなら、もうビーグルも武器もつくらない。パレルエンジンの設計図も情報も破壊する。

その言葉に、上は引き下がるしかなかった。機械をメンテするのも造るのも牧野のオッサンだったし、パレルエンジンについてはボイスかしらなかったからな。けど、奴らはまだあきらめてはいなかった。

新しいメンバーとしてではなく、候補者として5人が入ってきた。そいつらは、どこか俺達に似ていた。けど、違う。俺達は信用できなかった。ズバーンも奴らには懐かなかった。ズバーンは、古代レムリアのプレシャスで負の感情を持つ者には決して懐かない。それに、菜月も懐かなかった。菜月はレムリアの血を引いているから、予知能力が働いたんだろうな。

でも、映士だけは違った。あいつは、奴らと仲間になろうとした。奴らの持つ嫌な気に、あいつが気づかないはずはないのに。それなのに。今思えば、奴は人信じたかったんだろうな。あいつは、人間が好きだったから。けど、奴らはあいつの気持ちを踏みにじった。

俺達は、奴らを連れて任務に行った。簡単な任務だったから、実習に丁度いいと思ったんだ。けど、そこで奴らの1人がトラップを作動させてしまった。それは、宝を奪った侵入者を生きて帰さないためのものだった。狭い部屋の中、どこからともなくそれは現れた。黒い檻褸切れを纏い、漆黒の鎌を持った骸骨。俺達の持つ武器は、通じなかった。勿論素手でもダメだった。

そんなとき、映士がいきなりアクセルスーツを解除した。いきなりのことに、俺達は驚いた。諦めたのかと思ったよ。でもちがつ

た。あいつは、懷から一つの数珠をだすと菜月に渡して言った。イメージしろ、丸い円を、皆を守るための結界を。

菜月が言われたとおりになると、目には見えないが確かに壁が出来た。そして、映士は俺達をそこに置いて骸骨に立ち向かった。結果としては、奴らは全滅。俺達もかすり傷は負ったものの無事。だが、それから奴らは映士のことを人としては見なくなった。

映士は、あの時アシユとしての力で骸骨の動きについていき、高丘の力で葬った。それが、奴らには化け物と映ったんだろ。あいつは、表面上は笑ってたよ。本当のことだからしょうがない、俺は人間じゃないんだからって。

それから数日して、SGS内に変な噂が流れた。映士が化け物で、神無を襲ったって。そして俺達が、映士を使ってSGSを潰そうとしているってな。俺達はお互いに、それを信じなかった。明石も、ボイスも牧野のオッサンも。けど、映士と明石以外は全員裏切り者としてSGSを追われた。

「あいつらの狙いは、自分の思い通りになる駒が欲しかったんだ。そのために、俺達を嵌め、映士を孤立させた」

悔しそうに、真墨はそういうと俯いていた顔を上げ彼らに言った。

「頼む、あいつを助けてくれ。どうして、あいつがお前たちの元にいるのかはわからない。SGSを追われた俺達にできたのは、あいつを陰ながらサポートするだけ。内部のことは、ある程度しかわからない」

「蒼太さんの力で、わかったのはふたつ。奴らが、高丘さんを使って薬物などの実験をしていること。また、どこが人間と違うのか調べていたこと。」

「そして、あたし達を人質にして映ちゃんを哀しませたこと。あたし達は、奴らに対抗する力はない。けど、奴らは私たちの居場所を知ってる。もし、抵抗すればあたし達を殺す。そう言って映ちゃんを脅したの」

彼に続き、さくらも菜月も悲しみを帯びた声ではあるがまつすくな目だった。過去を悔やむのではなく、これからどうすればいいのか。

「お前たちの言うのが、あいつを助けて仲間に戻すというのならそれは無理な話だ」

「どういうことだ？」

克己の答えに、真墨は怪訝そうに眉を寄せた。他の者たちも同様の表情をしている。

「あいつは、もうお前たちの元には戻らない。いや、戻れない」

はつきりと、彼はそう言った。

「戻れないとは、どういうことだ」

「簡単な話だ。死人は地獄でしか生きられない。現世に出たら、たちまち消えてしまう」

その言葉に、みんなが息を飲んだ。もし、克己の言葉をそのまま受け取れば映士は死んでいる。だが、彼は確かに存在している。

「あいっただけじゃない。俺たちもまた同じだ」

「そんな、信じられるか！俺はあいっをこの目で見た、確かにあれは映士に間違いない」

信じたいのか、確信しているのか真墨はそう言い切った。他の者も、それを信じている。

「今から10年以上前、俺は死んだ。お袋は科学者でな、どうしても俺の死を認められなかった。そして、研究の結果死者を蘇らせることに成功した」

克己は、そう言うのと懷からコンバットナイフと取り出すと腕に突き刺した。だが、そこから血は流れない。傷も、抜くと同時に消えて行った。

「俺は、仲間を集めた。生き返った以上、何の意味もなく生きるのは嫌だったからだ」

「俺も、克己に助けられた。確かに死んじやいるが、そのおかげで未練は果たせた。こいつが仲間にするのは、死んでも死にきれない思いを抱えた奴だけだ。もっとも、それに腕が立つというのも付け足すけどな」

そう言っつて、自嘲気味の笑みを浮かべる。

「なら、どうしてそうなったのか聞いても？」

さくらが尋ねると、克己は思い出すように話し始めた。

「数日前の雨の夜、ビルの屋上で銃撃音が聞こえてな。見に行ったら、あいつが死んでた。胸を撃ち抜かれてな。周りには、同じく胸を打たれて死んでいる奴らが転がっていた。あいつがやったんだろ」

それに、彼らはまさかというように目を丸くした。映士がそんなことをするわけがない。彼は、自分たちの仲間で人殺しなどしない。いや、出来ないはずだ。

「嘘をつくなよ。映士が人を殺すなんて、あるわけないだろ」

「なら、誰が奴らを殺した。あの場にいたのは、あいつとあいつを狙った奴らだけだ」

「それでも、あいつが人を殺すなんてありえない。あるわけがない」

真墨は、こぶしを握り占めながら言った。

「あいつは、いつも怯えてた。いつ、自分が自分じゃなくなるか。いつまで、ここに居られるのか。もし、人を傷つけられればそれこそ自分はおちた側に行つて、二度と戻つてこれないかもしれない、それが怖いんだって。そう、言つてた」

「アシユの血と、それを滅ぼす宿命。だが、それも忘れてしまつていては意味がない」

克己の言葉に、真墨は俯いてしまった顔を上げ彼らを睨んだ。真墨だけじゃない、菜月もさくらも驚いたように彼らを見た。他の者たちは、何が何だかわからないという表情だった。

「あいつは、記憶を失っている。自分自身に関することのすべてをな。だが、それ以外は覚えている。お前たちが持つプレシャスについては、覚えていたようにな。今の奴の名は、芦原賢。俺達の仲間だ」

「それは、あいつが望んだのか」

真墨が尋ねると、克己は頷いた。それにそうか、と答えると彼は今度は睨むのではなく、何かを決意したような目をした。

「あいつが、決めたのなら俺は何も言わない。あいつが、俺達のことを仲間だと思っていてくれただけでいい。あいつが、人を殺したのだって何か理由があつたんだろう。すべてを忘れているのなら、そのほうが良い」

真墨は、懐から一枚の紙を取り出した。それは、昨日克己が彼に渡したもので、映士が唯一持っていたものだった。さくらと菜月は何か言いたそうにしていたが出来なかった。なんとなくだが、自分たちも同じように思ったからだ。

「だが、ことはそこまで単純じゃない。あいつは、失くしたはずの過去に囚われている。それをどうにかするには、原因を取り除くしかない。お前達にも手伝ってもらうぞ」

克己の言葉に彼らは目を睜った。もう、縁は切れたと思ったのだ。彼らは聞くべきことは聞いた。なら、もう関わるな。そういう

と思ったのに。

「どうした。お前は、高丘映士の仲間だったんだろ。なら、仇を取りたくはないか？俺は、賢の呪縛を解くために。お前らは、仲間の敵をとるために、手を組もうじゃないか」

そう言っつて、彼は不敵に笑った。

「そうだな。俺達は、映士の敵を取る。あんたたちは、仲間の為に。いいぜ、手を組もう」

真墨は、克己の言いたいことが分かった気がした。映士と彼は同じ人物。けれど、映士は死んでいる。同じけど違う。自分たちの仲間は、高丘映士ただ一人。生きているのなら、もう一度仲間に戻りたい。死んでいてもいい、一緒にいたい。でも、それをあいつは望まない。記憶を失っていたとしても、あいつが選んだ。なら、自分たちにできるのはあいつの望みを叶えること。そのためには、過去への決別の意味を込めて、仇を取ろう。

真墨は、そう決意した。

「そう言えば、あいつはどうしたんだ？今日は来ていないのか？」

「賢なら、今日はSGSで待機だ。京水と一緒にな」

それに、真墨は顔色を変えた。彼だけじゃない。克己と剛三以外のメンバーのすべてがだ。

「どうした？」

「映士が、映士が危ない！また、奴らに嵌められる」

「何？」

「お前らは、昨日俺達を逃がした。あいつらは絶対に面白くなかったはずだ。警告の意味を込めて、お前らの中で一番弱そうな奴を狙うにきまっている」

その言葉に、彼らもようやく真墨の言いたいことを理解した。自分たちの中で一番弱そうな奴。彼らの前で、一度もしゃべらず、ずっと後ろに控えていた者。

「賢が、狙われているってことか」

彼がそう言ったと同時に、通信機がなった。

「京水か、どうした」

嫌な予感がしながらも、克己は冷静に訊ねた。通信機の方こうでは、焦ったような声。

「大変よ、賢ちゃんが」

その後、彼らは急いでNEVERのアジトへと向かった。

繰り返す

「京水！」

叫びと共に扉が開き、克己と剛三。そして、ボウケンジャーとゲキレンジャーが入ってきた。誰もが一樣に息を乱し、焦っている。彼らの眼は、ただ一点京水の隣に座って俯き微動だにしない彼に向けられていた。

「何があつた？」

その言葉に、彼の肩が微かに震えた。

「賢、話してくれ。俺達は、どんなことがあつてもお前を信じる。お前をこちら側に引きずり込んだのは俺だ。お前に何かあったのなら、それはフォローできなかった俺の責任。お前が気にするのとじゃない」

彼は克己の言葉に俯いていた顔を上げた。その眼には、涙は浮かんではいない。だが、光もなかった。

「嘘だ。俺の言葉なんか誰も信じないし、すべては俺の責任。俺が、悪いんだ」

諦めたような声だった。どんな深い傷を負えば、こんな表情が出来るのか。克己たちにはわからなかった。

「すべてを判断するのはお前じゃない、俺だ。どうしても話さないと言うのなら、言い方を変えよう。命令だ、話せ」

克己から下された初めての命令。それに、彼は何も感ずることがないように頷き話し始めた。

どうして、こうなったかはわからない。けど、

俺と京水がサロンに行ったとき、奴らは俺達に何を言うでもなくそれぞれの作業に従事していた。秋乃と春樹は、パソコンに向かいに何かを打ち込んでいた。神無と冬樹はテーブルで資料を調べ、葉はモニターに向かい誰かと通信していた。

「ええ、わかりました。そのことについては、後でまた報告します。いい結果になるよう努力しますよ」

通信を終えた葉は、2人に顔を向け声を掛けた。

「さて、おはようございます。今日は、残りの2人は？」

「あたし達も暇じゃないの。彼らなら、今日は来ないわよ」

京水の言葉に、葉はそうですかと呟くと小さく笑みを浮かべた。一瞬のことだったが、2人は見逃さなかった。

「まあ、良いでしょう。今日は折角ですし、施設の中を案内しますよ。構造が分からなければ、いざというときに対応できません」

しね」

「残念だけど、その必要はないわ。大体の構造は頭に入ってるから、1人で十分よ」

そういうと、俺にサロンで待つようにいうと京水はどこかへ行っってしまった。

俺は何をすればいいかわからなかった。だから、空いている席に座ってずっと銃を抱えていた。その方が安心できる気がしたから。

どのくらいそうしていたかはわからない。たぶん、五分か十分くらいだったと思う。神無がにこにこしながら、俺に近づいてきた。

「ねえ、賢ちゃん。あたしとお友達になつて？」

笑顔だった。笑顔だったけど、怖かった。彼女の無邪気な笑顔が、無邪気だからこそ怖かったのかもしれない。

「どうしたの？賢ちゃんなら嫌だなんていわないよね？それとも、あなたも映ちゃんと同じなの？」

「映、ちゃん？」

俺は、彼女の言葉に無意識のうちに呟いていた。神無は、俺の言葉にそうだよと頷いた。

「映ちゃんはね、あたしたちの仲間だったの。でも、彼は私たちを裏切った」

そう言った彼女の言葉は、哀しそうだった。きっと、何も知らない人が聞けばすぐに信じてしまう。でも、俺はどうしても信じられなかった。それどころか、何故か悪寒を感じた。

「彼は、人間じゃなかったの。人間とは違うアシュって奴で、ずっと人間のふりをしてあたし達を騙していた。一度だけ、あの人アシュの姿になったのを見たけど、本当に怖かった」

彼女はそう言って、俺の腕を取り寄り掛かってきた。まるで甘えるように。

「でも、あたし達は彼を信じたかったよ。だから、チャンスをあげたの」

「チャンス？」

「そう。映ちゃんの家にあるプレシヤス、それをいくつか渡して欲しいって」

高丘の家は古い。しかも、監視者という特殊な家系。本人は意識しなくとも、地下室にはいくつものプレシヤスがあった。

「でも、彼はそれを断った。頷いていれば、皆から虐められることなんかなかったのに」

彼女に悪気はなかった。彼女にとって、映土が言うことを聞くことが当たり前で、それ以外がおかしいのだ。それを、誰も否定しない。皆、会話が聞こえているはずなのに。

狂ってる。こいつらは、人間じゃない。こいつらの考えは、ま

るでアシュと同じだと思った。

「その人は、どうなったんだ」

「わかんない。少し前までは此処にいたよ。でも、皆が油断した隙に逃げちゃったの。あんな傷だらけの体で、逃げられるわけないのに」

「仕方がないさ。あいつは所詮人間じゃないんだ。そこまで考えていなかったんだろ。なんてったって、モルモットだしな」

神無の言葉に、冬樹がそう言った。それにみんな同感だともいうように、くすくすと笑っていた。

「だからね、賢ちゃん。あなたは、友達になってくれるでしょ？」

彼女はそう訊ねたが、それはもう確定だった。もし、俺が断れば同じことをされる。鎖につながれ、自分の意思なくモノのように扱われ、生きている限り化け物のと罵られ、それでも死ぬことは許されない。そんなことは、嫌だった。俺は、克己たちと一緒に居たい。生きたい。それが、例え偽りの生だとしても人として、生きていきたい。

「俺は、克己たちの仲間だ。お前たちは気に入らない」

俺がそういうと、今までにこにこと笑っていた神無は途端に笑みを消した。そして、ポケットから何か、大きめのUSBのようなものを取り出した。

「そう。賢ちゃんも映ちゃんと同じなんだね。いいよ、賢ちゃんなんていない」

『サキユバス』

彼女がそのスイッチを押すと、辺りに重苦しい雰囲気とともに声が響き渡った。それと同時に、彼女の姿が変わった。黒と青の混じり合ったような色をし、背中には黒い蝙蝠のような羽。女型の怪人が、そこに居た。

「あーあ、怒らせちゃった」

「神無、やるのはいいですが余り物は壊さないでくださいね」

春樹と秋乃の言葉に、彼女は分かっているというと彼に向かい微笑んだような気がした。

「あたしのお願いを断ったんだから、覚悟してよね」

そいつはそういうと、手のひらにエネルギー状の球体を生み出した。そして、それを投げつけてきた。俺はよけようとしたが、動けなかった。その状況に、既視感を感じたんだ。前にも同じことがあったような、そんな気が。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4911y/>

NEVER&NEVER ~ 永遠と永遠 ~

2012年1月1日10時54分発行